

第六回 民話 ゆうわ座 — 話に遊び 話を結び 座に集う —  
民話のなかのじじとばば ～ 一粒の豆をめぐる ～

目次

1. 「民話 ゆうわ座」について	進行 小田嶋 利江	p.3
(記録 島津 信子)		
2. みなさんへの問いかけ		p.4
『ねずみ浄土』 瀬田貞二・文 丸木位里・絵	読み 島津 信子	
(記録 島津 信子)		
3. 伝承の語り手が語る「一粒の豆」をめぐる民話の映像 その一		p.7
『豆っこと地藏さま』 伊藤正子さん		
『豆と地藏さま—地藏浄土』 永浦誠喜さん		
(記録 加藤 恵子)		
(記録 島津 信子)		
4. みなさんと感想や意見の交換 その一		p.13
(記録 加藤 恵子)		
5. 伝承の語り手が語る「一粒の豆」をめぐる民話の映像 その二		p.16
『一粒の豆』 伊藤 正子さん		
(記録 山田 裕子)		
6. 探訪者がとらえた「民話の中のじじとばば ～一粒の豆をめぐる～」	話題提供小野 和子	P.18
(記録 山田 裕子)		
7. みなさんと感想や意見の交換 その二		p.27
(記録 小田嶋 利江)		

第六回 民話 ゆうわ座 各担当者

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江・加藤 恵子:
	話題提供	小野 和子
	読み語り	島津 信子
	板書	瀬尾 夏美
	撮影・録音	酒井 耕・長崎 由幹・福原 悠介
	SMT スタッフ	田中 千秋・田中 望
〈記録〉	文字起し	小田嶋 利江・加藤 恵子・島津 信子・山田 裕子

第六回 民話 ゆうわ座 一話に遊び 話を結び 座に集うー  
民話のなかのじじとばば ～ 一粒の豆をめぐって ～

〇はじめに

田中 千秋 (せんだいメディアテーク)

民話ゆうわ座にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。私、せんだいメディアテークの田中千秋と申します。皆さんの前の方に黒板型のテーブルがありますけども、「考えるテーブル」と言います。この「考えるテーブル」は、メディアテークが震災以降、始めたもので「震災なき地域社会」「表現活動」などについて地域で活動されている方々のホストを務めまして、来場者のみなさんとういう形で机を囲んで考えたり話したり対話するという場所となっております。そういう活動を行っているわけですが、もう何度も足を運んだことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、この「民話ゆうわ座」は民話声の図書室というみやぎ民話の会さんの有志の方々とせんだいメディアテークが協働で開催しておりまして、今回で6回目の開催となっております。

今回は「民話のなかのじじとばば ～ 一粒の種をめぐって～」というテーマとなっております。詳細につきましては、この後、進行をバトンタッチして話していただくんですが、本日の進行は「民話声の図書室」の小田嶋利江さんを中心に担当していただくことになっています。また、本日、みなさんと話した内容はここに黒板があるんですけども、瀬尾夏美さんという方に板書していただく予定になっておりますので、どういことを書いたのかなあ、話したのかなあということをおぼえ出すときなんかはすごいきれいに板書でまとめてくださっておりますので、見ながら参考にいただければと思います。

なお、開催に先立ちまして3点ほどお知らせさせていただきます。

1点目は本日の内容をメディアテークの事業記録としてホームページや広報物・印刷物で発信させていただきます。そのため、発言の内容やみなさんの様子を、写真とか映像で記録撮影させていただいております。なるべく個人が特定されない範囲で撮影させていただきますが、万が一映さないでほしいという方がいらっしゃいましたらスタッフまでお声がけください。

2点目ですが、本日のスケジュールですけども、皆さんのお手元のチラシにもスケジュールが書かれていますけども、進行上の都合により一部変更になる部分がございます。こちらの前の方に表示されておりますので、確認しながら見てほしいと思います。また、進行上によっては時間変更する可能性がありますのでご了承ください。

最後ですが、先ほどもアナウンスしたんですが、今回も3時間という長丁場となっております。基本、出入り自由ですし、間に休憩を挟む予定ではあるんですけども、途中お手洗いですとか、背伸びしたいなという方は自由に入ったりしてもらってかまいません。ちょっと体力を使うと思いますので、疲れないようにみなさん気を遣っていただければと思います。

長くなりましたが、小田嶋さんにバトンタッチして始めたいと思います。それでは、小田嶋さんよろしくお祈いします。

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 1. 「民話 ゆうわ座」について

司会進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

みなさん、こんにちは。今日はすごく天気が良くてよかったなあと思っています。

今日は、民話ゆうわ座の第6回目となりますが、最初に、今まであまり皆さんにお話してこなかったんですが、実は先ほども千秋さんがおっしゃってくださったように、配布資料には、主催として「みやぎ民話の会・民話声の図書室プロジェクトチーム」と「せんだいメディアテーク」という二つの主催者が書かれています。この機会に、この二つの主催者としてお互いの関係についてみなさんにも少しご説明して会を始めたいと思います。

これは協働事業とされていますが、我々みやぎ民話の会とせんだいメディアテークの出会いは、実は3. 11の大震災の時でした。大震災の後、みやぎ民話の会はこの「大きな出来事にどうやって向き合ったらいいのか」いろいろ考えて、まず自分の心にしっかりと刻みつけるためには、被災された方々のお話をそのまま聞こう、語りを聞こうということで、そういう「被災された方々の語りを聞く民話の学校」というものを開きましたが、そのときの記録をこのせんだいメディアテークにお願いできませんかと会員の一人が頼んだんですね。それが縁となって、我々みやぎ民話の会とせんだいメディアテークのつながりができました。その「民話の学校」の記録を快く引き受けてくださって、その記録はせんだいメディアテークの資料としてみなさんにも見られる形で納められています。

それだけじゃなくて、それ以降、そうした非常な出来事の記録をとっていただいただけじゃなくて、実は我々は45年間ほど県内を中心に東北各地の民話の語り手の皆さんをお訪ねして、採訪して、そのお話を聞いて記録するという活動をしてきたんですけども、そのたくさんの方々の声の資料と、少ないですが映像資料が溜まっていました。実はそれをなんとか次の世代の人々に手渡したいがために、ここにいらっしゃる顧問の小野和子さんがなんとかそれをきちんとした形で後につなぐ資料として活用できる場が設けられないかといろんな施設に頼んで回ったのですが、なかなか、うんと言って引き受けてくれるところがなかったんだそうです。ただ、こちらのメディアテークは、「それならば、それを一緒にやりましょう」と言ってくださり、我々の資料を新たな次の世代に手渡す財産として整備する活動を始めました。それが、民話の会の有志で作る「民話声の図書室プロジェクトチーム」と「せんだいメディアテーク」の協働事業です。

どんなことを行ってきたかという、まず「民話ゆうわ座」ですが、民話について見たり聞いたりして、みんなで自由に意見を述べ合う場をつくってきました。これで6回目になります。それから、「浜の民話」といいまして、被災した沿岸部がかつて聞いた、宮城県の伝承調査という県の調査のときに聞いた民話をもう一回みなさんにご紹介して、写真なんかと併せて展示する「浜の民話」という展示をしました。それから、我々が貯めてきたカセットテープ、音声テープを整理してCDにしていく作業、それから今残っている伝承の語り手を映像として撮ってこれを残すためにDVDにする作業、語りの撮影をしてCDとかDVDの制作そういうことをやってきました。

そのうち、これから始めようとする「民話ゆうわ座」なんですけども、民話声の図書室プロジェクトチームとせんだいメディアテークともう一つ、民話の非常に興味を持って参加したいという自由な市民と言いますか、その人々の三者によって作り上げているものなんです。これからみなさんに、我々がこれまでお聞きしてきた民話の語りを映像として観ていただいて、それについて採訪の時に、いろんな語り手とのやりとりの中で考えざるを得なかった様々な問題をみなさんにお示しして、それについて皆さんと一緒に自由に意見を述べ合って考えていこうというのが「民話ゆうわ座」です。

今までも、「かちかち山」とか「サルカニ合戦」とか「笠地藏」「食わず女房」それから「キツネ話」なんか

をやってきました。今回は、「おじいさん、おばあさん」で始まる話。というとすぐにいくつも思い浮かぶと思いますが、日本の民話って、なんでこんなに「あるところに、おじいさんおばあさんがありました」で始まるんだろうなということを考えてみたいですね。ただですね、それだけではちょっとあまりにも間口が広すぎるので、「豆っこ一粒の話」というか、豆っこ一粒をじじばばが追いかけていたり、拾ったりするお話っていうのがありますよね。その豆っこ一粒を巡る話に焦点を絞って、それを手がかりとして考えていきたいと思います。

## 2. みなさんへの問いかけ

司会進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

では、早速その中身に入っていきたいと思うんですが、みなさんがよく知っている、あるいは誰でもがよく知っている日本の民話で、「むかしむかし、おじいさんおばあさんがありました」っていう風に始まるよく知られたお話って、どなたか出していただけませんか。

（会場から手が上がる）「桃太郎」ですね、ちょっと書いていただきますね。「舌切り雀」というのが出てきました。「花咲かじいさん」これ、みんなご存じですよ。もう少し出してもらいますか。「瓜子姫」たしかにそうですね。最初におじいさんおばあさんが出てきます。「竹取物語、竹取翁」というお話です。「一寸法師」「鉢かつぎ」まだありますか。「鼠浄土」ですね。「三年寝太郎」はちょっと違うかな。「おむすびころりん」。もう少しきますか。本当にたくさんありますよね。なお且つ、日本の民話としてほとんど誰でもが聞いたことのあるお話ですよ。本当に日本の民話ってなんでこんなに、最初におじいさんおばあさんを主役としてお話を始めるんでしょうか。今まで当たり前のように思ってあまり考えてこなかったところもあるんですが、改めて思うと不思議ですよ。そのことについて、今日はちょっとやっていきたいですね。

まず、このおじいさんおばあさんが主役のお話、おじいさんおばあさんがありましたというお話、これは本当に日本の民話の中にたくさんあって、誰でもがよく知っていてみんな好きな話でもあるんですね。なお且つ、例えばグリム童話のようにお姫さまや王子さま、あるいは魔法使いが主役の話と違って、このおじいさんおばあさんがこんなにたくさん出てくるのは日本の民話だけなんですよ。それはとってもなんでなんだろうなって思います。

まずこのじじばばが主役のお話って、いったいどんな共通点があるのか考えてみたいと思います。三年寝太郎はちょっとちがうんだけど、おじいさんとおばあさんのほかにだれか家族は出てきますかね。登場人物として見当たらないですよ。ということは、おじいさんおばあさんは二人だけで家に暮らしている、生活をしているようなんですね。それから、例えば、竹取のおじいさんは竹を伐りに山へ行きます。瓜子姫のおじいさんおばあさんは山芋を掘りに山へ行きます。それから、桃太郎のおじいさんおばあさんはやっぱり柴刈りに山へ行きますよね。ということはおじいさんおばあさんは、例えば村や町のど真ん中のような平べったい平野のところにはいないで、山の際というか山の方に住んでいるんじゃないかなと思いますよね。二人はたぶん山際に住んでいるんじゃないでしょうか。そして、例えば笠地蔵の時は、村の境のお地蔵さまを通過して町まで出かけていくんですよ。じじばばが住んでいるところがなんとなく暗示されているような

気がします。

そして、あとですね、おじいさんおばあさんは何を生業にして暮らしているんだろうなって考えてみると、たとえば、かちかち山のおじいさんは山の畑に豆まきに行きます。それから、竹取爺のおじいさんはやっぱり竹を伐りに行くし、花咲じいさんのおじいさんは、ある話では川に<sup>なま</sup>梁かけに行くんですね。梁っていうのは魚を捕る仕掛けなんですけども、それで魚を捕っていた。このなかで、普通我々が日本人としてイメージするおじいさんおばあさんのように水田でお米作りをしている姿ってどうも思い浮かばないですね。みんな山の方で、木を伐ったり山芋掘ったりして、採集をしたり、花咲じいさんは川で漁労ですよ、それからこの中には出てこなかったけれども「雁とりじい」っていうお話では山に獣を捕りに行くんですよ。おじいさんおばあさんは、里でお米作りをしていないで、山の方で狩猟採集、狩りとか山仕事とか茸採り、山芋掘りとか山の畑で豆まきをしている、米を作らないで豆をまいて畑を作っている。田んぼがないんですね。どうもそんな風な暮らしをしているみたいなんです。

それから、このお話全体を物語として考えたいんですが、桃太郎は子どもがなくて子どもがほしいと思っていたおじいさんおばあさんがいて、桃から生まれた子ども、子宝を授かって、その桃太郎が主役になります。ネズミ浄土はおじいさんおばあさんがネズミから宝物をもらってくる、なんかみんな最終的にはおじいさんおばあさんが幸せになってめでたしめでたしで終わるようになっていて、っていうのは昔話としてよくあるとはいえ、みんな共通してるんじゃないでしょうかね。

一応、このじいさんおばあさんの昔話、日本の民話について確認したところで、今度は豆っこ一粒を巡るお話について、皆さんと確認してみたいんですね。例えば、豆っこ一粒のお話っていうのは「ネズミ浄土」と「おむすびころりん」、「地蔵浄土」と言ったりもしますが、それが豆っこ一粒を追いかけていくわけなんですけど、これはみなさんが、子どもたちも好きなのか、絵本にもたくさん取り上げられています。そこにたくさん広げどんなふうに取り上げられているのか、どんなお話なのか、最初にご存じかと思うのですが、確認してみたいと思います。まず、この「ねずみ浄土」という絵本を会の島津信子さんに読んでいただきますので、よろしくお願ひします。

\* \* \* \* \* 以下 絵本読み語り \* \* \* \* \*

## 『ねずみ浄土』

文 瀬田 貞二 絵 丸木 位里  
読み語り 島津 信子

おかし、あるところにびんぼうなじいさんとばあさんがおりました。  
ある日、じいさんは やまへしばかりに行くので、  
「ばあさん、なにかたべるものをこしらえてくれねえかい」  
とたのおと、ばあさんは そばこをこねて、そばもちをひとつこしらえました。じいさんはよろこんで それをもって やまへいきました。  
しばをかるうちに ひるになったので、つつみをだして ひろげると、そばもちが ころころと、やまさかを ころげおちていきました。  
じいさんは、「こりゃ、まて！」と、あとをおいかけていきますと、ころころもちは、じいさんの めのまえで、ちいさなあなに、ころんとはいつてしまいました。

じいさんが あなのそばにこしをおろして、「はあ、しかたねえなあ」とこぼしている、あなのなかから おおきなねずみが かおをだして、

「じいさん じいさん、ただいまは、けっこうなごちそうを ありがとさん。なにもないけど、ちょっくら うちへよってくだされや。それ、まなこをつむって、このしっぽにしっかりつかまって、な」とねずみごえでいいました。

じいさんが しっぽにつかまって、まなこをつむると、するするすると あなのなかへはいったようで、あとは こうこうと、かぜをきってとんでいくおとがしました。

「まだか、まだか」「まだ、まだ、まだ」といううちに、「じいさん、まなこあけてよし」とこえがかかりました。

じいさんが めをあけてみると、どが一んとしたところに、とのさまのいえのような、おおやしきがたっていて、あかいしょうじががらりとあいて、なかから あかあかとあかりがさしてきました。

なかのひろいざしきには、ねずみがいっぱいいましたが、みな じいさんをでおかえて、「ただいまは、ごちそうさん。まずまず、はいつてやすんでくだされや」とさそいました。

そこで、じいさんがざしきにあがると、あねさんねずみたちが、こううたっておどりました。

「ねずみのじょうど ねこさえいなけりゃ このよは ごくらくごくらく とんとん」

「まご ひこ やさご すえのすえまで ねこのこえ きくめえ とんとん」

おどるうちに、ざしきのいっぽうでは、あにさんねずみたちが、おおきなうすをひきだして、こめのなるきを しゃりしゃりゆすって、うすのまわりで もちつきをはじめました。

「ねずみと こびき どしどし ひかねば けんぞく くわんね しちょはちょ」

そして、つきたてのもちを じいさんのまえにおいて、

「さっきのそばもちほどは うまくなかろうが、たんとあがってくださいや」といいました。

また、ざしきのかたほうでは、ちがったうすをひきだして、かねのなるきを ざらんざらんゆすって、こがねとぎをはじめました。

「ねずみのじょうど ねこさえいなけりゃ ねずみのほうねん しゃきしゃき」

そして、おどりがおわって、おおきなねずみが、つきたてのもちと とぎたてのこがねを、どっさりひとつのふくろにいれて、「これは ほんにつまらないみやげだが、ばあさんに もってってくださいや」と、じいさんにかつがせてくれました。

じいさんが、また ねずみのしっぽにつかまって、まなこをとじると、またまた、こうこうとかぜをきるおとがして、きがついてみると、はじめのあなのそとにでていました。

じいさんは よろこんで、うちにかえって、ばあさんに ふくろをあけてみせました。

すると、こがねのしゃらしゃらなるおとをききつけて、となりの めくされじいさんが、

「じいさん、じいさん、どうしてそんなにこがねがたまったのかね」

と、ききにきました。そこで じいさんが、すっかりはなしてきかせると、めくされじいさんは、こおどりにしていえにかえって、ばあさんにそばもちをつくらせました。

あくるあさ、めくされじいさんは やまへしばかりにでかけました。そして、ひりめしのころになると、そばもちをだして、ころころ やまさかをころがりおとし、「まてまて」といいながら、そのあとをおいかけていって、あしのさきで、おりやり、そばもちをあなのなかにおしこみました。そして、そのわきに、ばんがたまで、まじろぎもせずにみはっていました。

やがて、おおきなねずみがすがたをあらわすがはやいか、めくされじいさんは、むんずとしっぽをつかんで、まなこをつむって、「はやくいけ」とどなりました。

めくされじいさんも、あかるいざしきにとおされました。だされたもちを、ぱくついているうちに、こがねをとぐおとをきいたので、のどからてがでるほどほしくて、がまんができなくなりました。そこで、

「ねずみのじょうど ねこさえいなけりゃ……」とうたっているさいちゅうに、

「にゃーお」

とひとこえ、ねこのなきまねをしました。

すると、ねずみたちは、「ねこがきた」といちじに、四ほう八ぼうにはしりさって、ぱっとあかりがきえてしまいました。

さて、めくされじいさんは まっくらがりのなかで、ごそごそさがしてみても、さっぱりうすもこがねもみつからず、どこがどこやら わからなくなりました。

こっちにゆけば かえられるか、あっちに「ゆけば、もどれるかと、あちこちかきおしているうちにそのてはすきのようにおおきくなって、くらいつちのなかにほりすすんでいきました。

ところが、いつまでほってもうちにかえれず、とうとうもぐらになってしまいました。

そして、いつまでも、つちのなかででぐちをさがしているそうです。

これで、とっぴん はらいの ぴい。

\* \* \* \* \* 以上 絵本読み語り \* \* \* \* \*

記録 島津 信子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

今のお話は団子でしたね。でも実は他の土地ではお握りだったり団子だったりするものが宮城県ではどういいうわけか豆、一粒の豆なんですよね。不思議ですね。では、その宮城のお話をこれから映像で語り手の語りとして見ていただきます。まず初めに語り手の紹介を加藤恵子さんをお願いします。

### 3. 伝承の語り手が語る「一粒の豆」をめぐる民話の映像 その一

加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

こんにちは。みやぎ民話の会の加藤と申します。これから私たちみやぎ民話の会が長い探訪活動の間、20年以上もの間たくさんのお話を聞かせていただきました永浦誠喜さんと伊藤正子さんの語りを見ていただきたいと思います。伊藤正子さんと永浦誠喜さんは、歳は20才近く離れていらっしゃるのですけれども、従弟同士のご関係で、永浦誠喜さんのお祖母・ようさんが、孫の誠喜さんと娘さんに昔話をたくさん語ったのですね。伊藤正子さんはようさんの娘の子どもさんなんです。ですから正子さんのお母さんの話は、永浦誠

喜さんのお祖母さんから聞いた話と出どころが同じだということで、とてもたくさんのお話を聞かせて頂きました。その記録は、私たちみやぎ民話の会の宝物としてたくさん残っているのですが、それを先ほどの小田嶋さんがお話のようにメディアテークでデジタル化したり、新たに撮影した映像をご覧いただきます。

正子さんは大正15年のお生まれですが、残念なことに昨年の五月末に亡くなられたんですね。その間に何回もお話をお聞きしましたが、そのたびにお母さんから聞いたお話そのままを語ってくださいました。小さな体で、ほんとに力いっぱいの語りを私たちに聞かせてくださいました。今日は、その中の一つで、先ほどの瀬田貞二さんの「ねずみ浄土」と同じようなお話なのですが、「ネズミの餅つき」という映像をこれからご覧いただきたいと思います。どうぞご覧ください。

\* \* \* \* \* 以下 映像上映 \* \* \* \* \*

## 『ネズミの餅つき』

語り 伊藤正子さん（宮城県登米市迫町・大正十五年生まれ）

おかあしおかしね。

おかしね、「今夜は餅搗いて食うかなあ」ってじんちゃんとばんちゃんいて。

ばんちゃんは、池でザックザックザックザックと小豆研いでたんだとね。

そしたら一粒、ぽおんとザルから跳ねて、ネズミ穴さコロコロコロコローと転がって行ってしまったと。「ありゃ、あったらもんだなあ、チョコキチョコキチョコキ。あったらもんだなあチョコキチョコキ」って掘ってったって。そしたらね、ネズミの家さ着いたんだとな。ネズミがみんな集まって餅つきしてらったと。「この里さあ ネコさぎゃ来ねげりゃあ おっかねぐねえ この里さあ ネコさぎゃ来ねげりゃあ おっかねぐね」って、ネズミたちがね、大人がら子どもがらみんな集まって餅つきしてだと。したらそのばんちゃんね、（ああほんでえ、少し餅つけたころネコのまねすんべ）ど思って隠れていたと。

さあ、みんなして餅搗いて、いっぱい餅できたと。そして、みんなして丸めて出来上がったころ、「ニャオーン ニャオーン ニャオーン ニャオーン」って叫んだと。そしたら、「そうらネコ来た」って、みんなわあと逃げてしまったと、ネズミたちがね。したらばんちゃん、その餅腹いっぱい食って帰ってきたと。えんつこもんつこさげした。

\* \* \* \* \* 以上 映像上映 \* \* \* \* \*

これは、小野和子さんが伊藤正子さんとお二人で聞いて語った映像を、このメディアテークの事業で記録したものです。この記録の映像は、この2階の映像音響ライブラリーに置いてあります。

続きまして、永浦誠喜さんの「豆と地藏さま」というお話を映像で見たいと思います。永浦さんは、明治42年にお生まれになり、2001年に94歳で亡くなりました。永浦さんとは、長いお付き合いのなかで、70代の時に体に貯めておられた民話のすべてをお聞きし、その後、90代になられてからもう一回民話を語っていただきました。その2回にわたって300近いお話を聞かせて頂きました。2回目の時に、どうしても映像で永浦さんの語りを残したいということで、みやぎ民話の会の会員が家庭用のビデオで撮ったものをDVDにしました。とても貴重な記録です。懐かしい永浦さんのお話をみなさんと味わってみたいと思いますのでご覧ください。では、お願いします。

## 『豆と地蔵さま—地蔵浄土—』

語り 永浦 誠喜（登米市南方町）

こんだぁ「豆と地蔵さま」。

むがし。

やっぱりおじんつぁんとおばんつぁんがあって、おじんつぁんが土間にわを掃いていたら、豆っこ一粒みつけたがら、取んべどしたっけ、ころんころんとネズミ穴さ入ったとね。（なんだ、ネズミ穴さ入ったな）どって、ちゃかちゃかと掘って行ったら掘れば掘るほど掘ったくれ中さ入っていくんだと。そして、いあんばい掘ったれば、どふーんと踏んどったがら、（あれ）っと思ってみたれ、そこに地蔵さま、にこにこ居たっただ。「そこに来たものは何もんだぁ」って言われたがら、「豆っこ探しにきた爺でがす」って言ったら、「ああ、そうがあ。膝さ上れ」って言われたんだと。「どってももったいなくて上がられしえん」って言ったと。「いいがら上がれ」って言われて膝さ上がったと。「こんだぁ、肩さ上がれ」って。「膝ささげえももったいなくて上がられねえど思ったのが、肩さまで上がらんねえべっちゃや」「いいがら上がれ、いいがら上がれ」って言うがら肩さ上がったと。「こんだぁ、頭さ上れ」って言ったおん。「どっても頭さなんぞ上られしえんでがす。お地蔵さまの頭さ上がられしえんでがす」って言ったら、「いいがら上がれ、いいがら上がれ」って、頭さ上がったれば、足滑らせてつるっど滑って後さぼとんと落ちてしまったんだと。「そごにじっとしている。今にな鬼ども来て、ここで博打打ちはじめんで金いっぺえごさ散らすがら、そんどき鶏の鳴き真似するようにケケコッコって真似しろ。そうすっど鬼どもみな逃げてぐし、金あるやつみなお前集めて持っていげ」って。

そこで、じっとして待っていたれば、地蔵さま言う通り、鬼どもは赤い鬼がら青い鬼がらみな集まってきた、そこで焚火しながら博打打ち始めたんだと。そして、夢中でやってる。いあんばいになったっけ地蔵さま合図するもんだがら、そこで、「ケケコッコケエー」って叫んだんだと。一回だけ鶏の真似っこしたばり、まあ一回叫んだ。そして、「あれ一番鶏がや。今夜早えなや」って鬼ども言って、またしばらくしてがら、「ケケロケエー」って鳴いたんだと。そして、「あやあ、二番鶏だっちゃ。夜あげっからは止めねげねえ」って、またしばらく経ったがら、まだ「クッケケロケエー」って鳴いたと。そしたら、鬼どもは「それ夜明けっどお」って、金そごさ置いてみな逃げて行ってしまったんだと。地蔵さま、「そいづみな集めて持っていげ」って言われて、そいづ持って帰って、そして大分景気良くなったんだと。

そごさ隣のおばんつぁんが火いもらいに来て、「なんだ、こっちでたまげて景気いぐなっどご」って。おばんつぁんが隣のおばんつぁんと仲間だがら、「ずんつぁま豆っこみっけで、そいづ掘っていったれば、こういうごあって金いっぱいもらってきた、そんで、今までの暮らしなんぼが楽になったんでがす」って言ったんだと。「んでえ、おらほのずんつぁんやなくてわがんねえ」ってことでそのおばんつぁん帰ったと。そして、次の日さっそく朝に起ぎでがら、ずんつぁまんど土間掃かせたけど、豆っこさっぱりねえがら豆っこ持ってきて、そしてネズミ穴さ入れで、そのネズミ穴手で押し押しして掘って行ったら、やっぱりどふーんと踏んどって、地蔵さん居たがら行ったんだと。そんでえ、膝さ上がれとも言われないのに膝さ上がる、肩さ上がれとも言われないのに肩さ上がる。そして、頭さ上がれとも言われないのに頭さ上がって後ろであど待っていたと。

やっぱり、その晩も鬼ども来て博打打ち始めた。いつまあでも待ってんのやんだぐなっどしまっど、そして鶏の叫ぶ真似したんだと。したっけ、「あれえ一番鶏げえ、タベより今夜早ようだなあ。おがしい

んでねがや」って鬼ども。そして、二回目、三回目にきたんだげんども、早<sup>はえ</sup>ど思ってもとにかく鬼どもは夜明けからって逃げていったんだと。んでえ、こんどぎだなあど思ったがらずんつあん出ふあっていったれば、一人の鬼、鉤吊るして焚火してたったの、お湯でも湧かしてだったがしてさあ、その鉤さ鼻引っかけでしまって、「あでででえ」って叫<sup>さけ</sup>んでだったと。そごさ、欲たがりずんつあん出ふあって行ったっけ、「早く戻<sup>はえ</sup>ってこう戻<sup>はえ</sup>ってこう。人っこ居だぞう」って騒いで、そして逃げて行った鬼、「タベ置いていった金、このずんつあま盗んでいったな」って、仲間の鬼ども呼び集めて、そして、「このおずんつあんタベも盗んでいったんだがら、少しいじめてやれ」っていうごとで、ひっかいだりなどして、着物剥いで体中ひっかいだりなんかして、ほうほうのていで逃<sup>け</sup>げて帰<sup>かえ</sup>ったと。

おばんつあんは家で、(なんぼ錢<sup>せん</sup>持<sup>も</sup>ってくんだがな)って、ずんつあま待<sup>まち</sup>ってたれば、真<sup>ま</sup>っ赤<sup>あか</sup>になっ<sup>け</sup>て帰<sup>かえ</sup>ってきたがら、着物の赤<sup>あか</sup>え着物でも着<sup>き</sup>てきたと思<sup>おも</sup>ったら、血<sup>けつ</sup>だらけになっ<sup>け</sup>て帰<sup>かえ</sup>ってきたと。そして、さんざんな目に遭<sup>あ</sup>ったんだと。

んだがら、人の真<sup>ま</sup>似<sup>に</sup>するもんでねえんだどっしゃ。えんつこもんつこさけした。(会場から拍手)

小野：永浦さん、落ちて行った豆はどうなっちゃったんですか？

永浦：そいつは分<sup>わ</sup>かんねえ。

小野：ああそうか。そこ特徴<sup>ていしゆう</sup>だね。

秋山：「どふっと踏<sup>ふ</sup>んどった」の踏<sup>ふ</sup>んどるってのは？

永浦：踏<sup>ふ</sup>み通<sup>とお</sup>すってことだべね。

小野：いい言葉<sup>ことば</sup>だねえ。

\* \* \* \* \* 以上 映像上映 \* \* \* \* \*

はい、このお二つの話、ほんとに頭の中に絵が浮かぶような語りだったと思います。みなさんのお手元にお渡しした資料の中に、宮城県で聞いた豆の話をたくさん載せてありますし会場の後ろに、今の永浦誠喜さんと伊藤正子さんの DVD のお知らせもありますので後でご覧ください。それでは、司会に移したいと思っています。

小田嶋一ありがとうございました。どちらも語りの雰囲気がよく出ている映像だったなあと思います。ちょっと質の違う語りの場なんだけれども、人それぞれ味わいのある語りでした。

**【日本人と豆】**聞いていただきましたように、正子さんは小豆ですけども豆ですね。永浦さんの方の豆というのは、これは多分大豆だと思います。大抵昔の方は、豆という大豆を指すことが多いようですね。だから、大抵の場合は、豆っこというのは大豆のことがほとんどのようです。

この豆って何なんだろうなあと思<sup>おも</sup>いますよね。みなさんにそれを考えていただくのに参考になるかどうか分からないのですが、ここで少しだけ豆と日本人との関係みたいなものを少し探<sup>たず</sup>ねていけたらなあと思<sup>おも</sup>うのです。

**【かちかち山の風景】**「かちかち山」のお話で、宮城のお話でこういうのがあります。

お爺<sup>おや</sup>さんは山の畑に豆蒔<sup>ま</sup>きに行きました。これは、大豆を蒔<sup>ま</sup>くんですね。「一粒蒔<sup>ま</sup>いて千粒<sup>せんりゅう</sup>になれえ。一粒

蒔いて二千粒になれ」と言いながら豆を蒔きます。そうすると、タヌキが出てきてその辺にある木の切り株にちょこんと座って、「一粒蒔いたら腐れろ。じんじ豆腐れろ」というふうに悪口をつくんですね。ここで、お爺さんは、山の畑に大豆を蒔きにいったときに、タヌキが出てきて切り株の上に座ったってという映像を覚えておいていただいて。

**【人間が作り出した植物】** ここでちょっと話はすごく変わりますが、豆というのは、これは作物と言われますね。その辺にあるエノコログサとかカラスノエンドウも豆ですけども、それとは違ってこれは人間が作り出した栽培する作物、つまり人間が作り出した植物なんですよね。これは、アワでもヒエでもイネでもみんな作物です。

作物というのは、その辺にある野生の植物の中でこれぞというものを人が、何回も何回も繰り返しそれを育てていくことで段々豆を大きくしたり、それから都合のいいときに実をつけるようにしたり、それからオシロイバナのようにぱっと種が散っちゃって無くなってしまうと、それを収穫できないですよね。だから稲のように穂に熟してもそのまま穂にくっついて飛び散らないようにしたり、そういうふうは何千年もかかって人間が植物と一緒にあって、その性質を変えていったものなんです。

**【ダイズの原産地】** 大豆も実はそうなんです。大豆の野生の元はツルマメだったそうなんですけども、これは主に中国、朝鮮にだけあるそうです。それを作物にしたのは、ちょっと前までは中国の人が作物にして、それもすごい前ですよ、四千年ぐらい前なんだそうです。日本に伝わってきたと言われていたのだそうですが、最近になって日本の縄文時代の中期ですから、大体五千年ぐらい前の遺跡から出てきた土器にその豆の跡が付いていて。それを顕微鏡で見たら、どうも栽培される大豆だったらしいということで。おそらく日本でも、その野生の植物ツルマメから大豆が作物として作り出されていたんじゃないかと最近では言われるようになったそうです。それも、五千年前の縄文時代ですから、そのころから日本人は、まあ、そのころはまだ日本人ではないですが、この日本列島に住んでいた人々は、大豆を作物として作って、それと共に生きてきたのです。

**【イネの原産地】** それと比較するとちょっとあれなんです。米、私たちの主食である米のイネも作物ですが、これは中国で作物になって日本に伝わってきたもので、野生のイネというのは日本にはないそうです。それが伝わってきたのは縄文時代の晩期と言われてるので、大豆の方が実は私たちとの関係は古いのだそうです。

**【ダイズとイネ】** 大豆はどうやって作るかというと、最近までは焼き畑農法というので作る場所が結構あったそうです。つまり、山を切り拓いてそれを焼いて、その灰を肥料としてそこに豆を蒔いて育てる。後は、手間もいらず肥料もいらずそのまま豆が採れる。

ところが後から伝わってきたイネ、イネと言っても水田に蒔く水稲と言われるイネは、ちゃんと水を引いて、水を引くのがなければまあ湿地帯とか川の水が入るようなところにみんな水路を作ったりして、人手をかけて場所を作って、そこに蒔いて、なおかつ草取りなどの手入れをしながら育てないと採れないものなのだそうです。

ですから、それ以降大豆もイネも日本人とはすごくなじみが深くて、ずうっと共に生きてきたものなんですけれども、その住み分けとか役割とか、それは少しちょっと微妙に違うものだったようですね。大豆は、手間もいらず肥料もいらずに個人でも作れるし、それから山の畑でもやれる。それに対

してイネ、米は、村で共同で水を引いて田んぼを作って結<sup>ゆい</sup>こことって、共同作業で草とりをしたり、代掻きをしたり、田植えをしたり、稲刈りをして採らないといけない、そういうものだったみたいですね。

なおかつ、東北でよく見られて他には見られなかったのですが、大豆のことを<sup>あびまめ</sup>畔豆と言いませんでした。知っていらっしゃる方もおられると思いますが、水田の畔に豆を植えていたんですね。ですから、米と大豆も一つのセットになって作られていたのです。栄養的にも炭水化物の米とタンパク質が豊富にある豆で、それだけの組み合わせで栄養的にはすごく優れたもので、獣や魚の肉を摂らなくても十分だったそうです。今はあまり見られなくなりましたが、畔豆というのは宮城でもすごく作られていて、大豆と言えば畔豆というふうな言い方をしていたので、今でこそあまり作られませんが、昭和の初めころですね、大豆の全国生産量は北海道が約30%、その次が実は東北の青森、岩手、宮城の三県で20%も採ってたそうですね。だから大豆の産地だったのです。

**【ダイズの毒ぬき技術】** もう一つ豆と言えば、豆を生で食べる人はいませんよね。豆には毒があるんだそうです、生だと。それは、不思議なことではなくて、ほとんどの植物というのは、なんらかの毒を持っていて、それで動物には食べられないようになっているんですね。それを作物にすることによって毒を薄めていったり、それから毒を抜く方法を人間が考えだしていくんですね。それで、作物になっていくんですが、例えば大豆は毒なんですけど、加熱する、熱を加える。あるいは水に浸して晒<sup>す</sup>す。播<sup>ま</sup>りつぶして粉にする。それから、納豆のように発酵させて毒を消す。そんなふうにして食べられるようになったことで、人間、日本人にとって大事な作物になったんですね。

実は、イネも同じような日本人と深い関係があるんですけども、『稲と日本人』という<sup>かいのぶえ</sup>甲斐伸枝さんという絵本作家が最近出した絵本の中に、稲と日本人の関係を、「生死を共にして生き抜いてきたかけがいのない仲間同士という間柄なのです」と書いてあるのですが、これは、実は大豆と日本人でもそうなんじゃないかなと思います。豆というのは、こんなふうにごく日本人と、宮城県とかかわりの深いものなので、そこから、「一粒の豆」を考えてみると、なにか参考になるのではないかなというふうに考えました。

もう一つ、これは簡単に。この地蔵浄土とかネズミ浄土とかという話は、永浦清喜さんは、これは「<sup>じよど</sup>浄土話」だと言ってたそうです。浄土の話、西方浄土とか極楽浄土とかいう浄土のお話として考えていた。地面の下に入っていく話なんですけれども、そこにお地蔵さんやネズミの国がある。それもどんなふうにか考えたらいいのかなあといういろいろ思います。

記録 加藤 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

#### 4. みなさんと感想や意見の交換 その一

司会進行 小田嶋 利江 (みやぎ民話の会 「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

それでは、以上のお二つの正子さんと永浦さんのお話をみなさん聞かれました、豆って何だろうとか浄土ってなんだろうとか、なんでもいいんですけれども、そこで何か考えられた方、感じられた方がありましたらご発言頂けましたらと思います。いかがでしょうか？質問でもいいです。

**参加者 A (山田裕子)**—先ほどからなぜ豆なのかということがありましたよね。そして今、司会の方から豆の説明があったのですが、畔豆ってというのは、あるお婆さんから聞いたのですが、最近までやっていたらしいんです。俺家はうんと貧乏<sup>おらい</sup>だったんだってそのお婆さんは言うんですけども、お金持ちの人は、ちゃんとした畑で豆を作るけど、俺家<sup>おらい</sup>みたいな貧乏なのは畔で豆を作ったんだって言うのです。豆は必ず作ったって。なんで作ったのって訊いたら、豆はね、俺たちはおかずなんて何にもなかった。だから、これで味噌を作ってねって。その味噌ってというのがすごく大事なものだだったから、必ずその畔豆って作らなくちゃいけなかったんだって。今話を聞いて、ああそうかと思ったんですけど、その方は山形の方でしたけれども、豆ってやっぱり東北の人にとってはすごく大事なものだんだなああと、今お話を聞いて思いました。

**小田嶋**—ありがとうございました。そのことについてでもいいですし、また新たに何かありましたら…

**参加者 B**—思いついたんですけども、例えば米っていうのは天候に左右されて、飢饉のときなんかは採れない。でも、豆っていうのは、どんな天候でも強いものではないのかなと。だから、飢饉とかそういう作物が採れないとしても豆を食べていけば生きていける。そういったような意味もあったありがたいものであったのではないかなと思いました。

**小田嶋**—ありがとうございます。それはほんとにすごくあったと思います。先ほど「かちかち山」の話をしましたけれども、「かちかち山」のタヌキが座ってるのが木の切り株なのですよね。ということは、山の畑は、林に囲まれていてつまり森を切り拓いて、その切り株が残っているような畑であって、とてもよく肥えているわけではないんですね。豆というのは、栄養をやるとかえってうまくないみたいなことを聞いたことがあるんですが、肥料もいらなし、手間もかからないし、丈夫でなおかつタンパク質をすごくたくさん作ってくれる有難いものなんですよ。なおかつその切り株があるということは、焼き畑農法が長く続いた山の暮らしとすごく結びついているのかなあと思いました。先ほどの爺婆の話で、狩猟とか狩りとか山仕事とかそうしたことを生業にしている爺婆っていうことで、やっぱりその暮らし、その背後にある暮らしが垣間見えているのかなという気がします。あと何かありましたら、あ、はい。

参加者 C—今のお話から外れると思うんですけど、私たちの日常の中で「豆豆しい」とか、「豆で達者で」とか、それから「頭」っていう字、こちらに豆編を書きますよね。だから、子どものころ豆を食べると頭がよくなるって言われてました。今のお話からちょっと外れてごめんなさい。以上です。

小田嶋—いえいえ、外れてません。それだけ、我々と豆の関係って深いってことでしょうね。豆まきをしたり、それから、豆で作占っていうんですか、今年の豊作凶作を占うっていう行事もあったり、だから、豆っていうのはすごく生活に密着してると同時に文化の深いところまで関わっているのかなという気がします。あと何かありますでしょうか。

参加者 D—あの、豆で思い出したんですけど、私たち小さい頃は、味噌と醤油と豆腐とそれからしみ豆腐、納豆みんな豆で作ってたんですよね。冬場は特にね、そういうの足りない部分を豆で補ってたのかなあって、今ね懐かしく思い出されました。

小田嶋—ありがとうございます。ほんとに豆っていうのは、かつての農村の暮らしにとっては無くてはならなくて、食料であるし、調味料であるし、ああそうかといろいろな行事のものもあるし、神さまに供えるものであったり、ほんとに大切な大切な一緒に生きてきた仲間というのは確かでないかなと思います。あと、なにかあるでしょうか。あっ、はい。

参加者 E—なんか質問というか、どうしてなのかなと思ったことなんですが、お爺さん、お婆さんが出てくる民話というのは、日本人にとっては割とポピュラーなものかと思うのですが、その中に日本人の主食となっている米の話がないっていうのはどうしてなのだろうなあと思いました。

小田嶋—ほんとに、それは不思議ですよ。日本人は米が主食なんだと私たちは常に思ってきたのですけれども、その主食を作ることをしてないお爺さん、お婆さんが主人公だってこと、それってどういうことなのか、それをこれからちょっとみなさんと考えていきたいなあと思うところなんです。いいところを言っていただきました。ありがとうございます。

参加者 F—この会の以前に「笠地蔵」というのがあったと思うのですが、あの話というのはお爺さんが夜なべして稲わらで笠を作る話でしたね。だから私は、あのお爺さん、お婆さんはお米を作っていたと思っていました。でえ、あの話は笠を売りにいって売れなくて、地蔵さんにかぶせてあげてご利益があったという話ですね。これは、ある行為に対する奉仕みたいなのが伴うという紹介いただいた話の全体に流れている考え方だと思うのですがね。でえ、私少し英語の勉強をしたものですから、1845年に書かれたアメリカの話ですね、『森の生活』っていう本があるのです。その中で、ソローというその作者が、ケンブリッジのちょっと西のほうに山の松林を買って、そこに一軒の家を自分で建てて、畑を開いて自活するわけです。そのときに最初に蒔いたのが大豆です。だから大豆というのは、北アメリカで今非常に大切な輸出品で、今凶作なので北海道の小豆が不作なのと同様に困っているわけですよ。おそらく北海道のあの寒い土地で育つものといったら大豆だったんだらうなあと私は思

うのですね。おっしゃるように、肥えた土地でなくても豆は育ったわけですよね。非常に強い根粒バクテリアを自分で作って、自分自身を養うわけですね。残っていた土地が肥えてなくても非常に優れた植物だと思います。1985年にリーマンショックが起こったときに、日本人も豚肉が食べられなくなったんです。そのときにどこかの大学の先生が、「高野豆腐を食べろ」というそういう提言をしたんですね。なぜかという、「豚を食べなくてもタンパク質は摂れる」と言ったんですね。すごい考え方だと思ったんですね。だから、さっきの話の中で豆腐が出てきましたが、非常に洗練された食品だと私は思いますね。日本人が考え出したわけではないと思うんだけどね。東南アジアにもあるんじゃないかと思うのです。豆腐を腐らせたような発酵させた食べ物があるそうですね。

小田嶋一—あの、笠地蔵の笠は、あれは菅で作ると言われています、お話の中ではね。菅を刈って菅笠を作る。だから、稲の笠ではないと思いますし…菅は湿地にはえるイネ科なのかな、植物の葉です。あし（葦）とは違うのですが。異種ですが似たような草です、ですから米作りは出てこないと思います。

参加者F—いやあ、僕は隠れてやっていたと思います。（会場から笑い）それぐらいの知恵はあったと思うんです。

小田嶋一—でも米ができないところって実は最近まであるんです。だから、藁がどうしても必要なときは、藁を買うんです、実は。藁の細工をするときには。

参加者F—それは、今福島で起こっているんじゃないですか。藁を買ってますよ。

小田嶋一—だから、山の集落では米は作らなくても、藁が必要だから藁を買ってくるということがよくあるみたいです。

参加者F—なんのために？

小田嶋一—藁はいろんな物を作るときに必要な材料ですから。最近では作りませんが<sup>わらし</sup>草鞋もそうだし、藁は様々な藁細工をしますので、はい。ありがとうございます。

参加者G—笠でなくて藁と取り換えて、その藁を全部あげてね、橋のどこに来たときにこいづも川の神さまさといってね投げたら、神さまが川の底からきてね、川の底に連れていかれたっというような話はあるのね。藁は大事だってことね。

小田嶋一—そうですね。ありがとうございます

参加者H—ちょっとその特徴に反論というか、私が知っている話に「欲深か」って話があります。それは新庄の人に聞いた話を聞いたんですけども、それは、「頭やみ」みたいなもんなんですけど、柿の種を頭に植えたら、柿の実ができて、その柿を売ったらキノコが出て、それ

から抜いたら雨の水が溜まって、今度は雑魚を売る。最後に隣の親切なんですけど、そのお爺さんが、最初に柿の種を植えたお爺さんなんだけど、魚を売ったのでまた頭にきて土を埋めたんだそうです。そして、土を埋めてちょっとしばらく経ったら隣に行って頭を見せてもらったら、その土が水田の栽培に最適だったと感じまして、その親切な爺さんは、年貢を払うから米を作ってくれと、その頭でね。そして、半分ずつ米を作って年貢を払って、その爺さんも幸せに暮らしたんだというお話もあるんです。お爺さん、お婆さんも幸せになったし、ここに来るまでに桃太郎のお話でも柴刈りに行きます。いくら水田を栽培してましても、竈の火とかなんとか全部柴でやったりするので、それは不思議でないと思ってやっておりましたので、桃太郎のお爺さんは水田を作っていたと思いました。

小田嶋—いろんなご意見が出てきました。この話は、じゃあ次に持ち越しということで、次にまた同じように考えていきたいなと思います。ええと、ここでしばらく休憩を入れまして、次にまた新たな「豆っこの話」をみなさんと見ていきたいと思います。

## 5. 伝承の語り手が語る「一粒の豆」をめぐる民話の映像 その二

進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会 「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

お待たせしました。じゃあ後半に入ります。さらに、もう一つ「豆っこの話」をみていただきます。伊藤正子さんの今度はちょっと違う「豆っこの話」なんですけど、一番最初に正子さんと聞き手の小野先生とのやりとりがありますので、そこも注目して聞いてください。お願いします。

### 『一粒の豆っこ』

語り 伊藤 正子 聞き手 小野 和子

小野—ほかに<sup>ひとつぶ</sup>豆っこの一粒の話、正子さん、ご存知ないですか。一粒の豆っこを落としてやった話

正子さん—それは人間としての

小野—うん、人間としての

正子さん—この話だとね、誰も聞いたって言うの。

小野—今からの

正子さん—これから話す話はね。

小野—なんか不思議ですね。

正子さん—わたしたち何人か集まったところで昔話の話出たとき、「話なんて聞かない。でも、豆っこの話は聞いた」って、誰もが言うわけ。

小野—ねえ

正子さん—岩手県にいったときも話をしたら、それだけはみな聞いている。

小野—どうしてなんでしょねえ。そして、それだけはみんな覚えているのね。

正子さん—覚えてる。

小野—ほかのは忘れてもね。やっぱりその話は、なんかもっているんでしょね。それじゃ、正子さん、ひとつ聞かせてください。

正子さん—短い話だけどね。

ひとつぶ  
一粒の豆っこ

むかあし、むかあし。

あるところに、じんつあまとばんつあま暮らしてたんだと。

そうしたら、じんつあま、土間掃いでらんだとね。ぱらぱらぱらって土間掃いでたら、豆っこ一粒見つけたんだとね。

「ばんさま、ばんさま、豆っこ一粒見つけたやあ」

って言ったと。

「あらあ、なあんと、豆っこ一粒いがったねえ、いがったねえ」

ばんちゃんがね、焙烙でからころからころ煎ったんだと。そして、臼を出して、とんとんとんとと、こづいたとね。くだけできたけども、

「じんつあま、じんつあま。おら家にころし(ふるい)なくて、なにでこの豆おろすべやあ」

って言ったと。

「ほだなあ、ころしなくて、おろしようねえなあ」

「ほだらば、じんつあまの禪の片っ端でおろすべやあ」

そう言って、二人でそっちとこっち持って、ばあふら—ばあふら—ばあふら—、そのこづいた豆をね、おろしたと。

そしたら、豆粉がいっぱい出たどね。はあ、豆粉いっぱい出たからって、二人でだんごを搗いで、夜食ったと。あまった豆粉をね、

「じんつあまや、この豆粉、どこさおくべやあ。棚さおけばあネコ食うし、戸棚さおけばあネズミ食うし」

「ほだなあ、ほだら、じんじとばんばの間っこさでもおけやあ」

って言ったと。

「ほだねえ」

って、じんじとばんばの間っこさおいで寝たど。

そうしたら、夜中に、じんちゃんが、大きな屁、ぼーんとたれでしまったど。

そうしたら、豆粉はみんな吹っ飛んで、ばんさまの股まで吹っ飛んでしまったど。

そしたら、じんつあん、

あつたらもんだなあ ペタペタペタ

あつたらもんだなあ ペタペタペタ

と舐めたどき。

えんつこもんつこ さげすた

小田嶋一ほんとうにいい語りですね。とってもいいお話だと思います。では、この「豆っこ」のお話を手掛かりにして「民話のなかのじじばば」について、小野先生に話題提供してもらいます。よろしくお願いします。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

## 6. 探訪者がとらえた「民話のなかのじじとばば ～一粒の豆をめぐって～」

話題提供 小野 和子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

話題提供をいたします小野和子です。よろしくお願いします。

前半の話のなかでは、じじばばが登場してくるたくさんのお話のなかから、豆粒を転がしてしまったおじいさんとおばあさんの話を中心に扱っていただきました。

ひとりのおじいさんは、ころころ転がって行ってネズミ穴に入ってしまった豆を追いかけて行って、ネズミの国にやってきましたね。それから、もうひとつの話のほうのおじいさんは、やっぱりその豆を追いかけて行って、地蔵さまのいらっしゃる地蔵さまの国のところに入って行って、その地蔵さまから宝物をもらったりして帰ってきましたね。

それでね、永浦さんがこの話をされたときに、さっきもちょっと小田嶋さんが言われましたが、「これは浄土話だ」って言われたんですよ。で、わたし「浄土話ってなんですか」って聞いたんですよ、そのときわからなかったもんですから。そしたら、「浄土の話で、あの世さいった人の話だ」って言うんです。ですから、一粒の豆を追いかけてネズミ穴に入っていったおじいさんたちは、浄土へいった、あの世にいった、そして、あの世でたくさん宝物を手に入れて、またこっちへ戻ってきて幸せになったと、こんなふうに理解することができました。

さきほど島津さんが読んでくれた瀬田貞二さんの再話も、本の題は「ねずみじょうど」でした。この「浄土」という言葉の意味を、どういうふうにみなさんがとって考えていかれるかってことは、あのじじばばが出てくる昔話を考えるときにとってもだいじなことだと思っております。

で、わたしは、主として、今、正子さんが語ってくださったほうの豆を頭におきまして話をさせていただきたいと思うんです。正子さんも語る前におっしゃったように、「この話はたいていの人知ってるんだよ」と言ったけども、ちょっと終わりのほうで艶話みたいになってくるでしょ。抱いて寝て、それが屁で飛ばされて、それを舐めたなんていうと、あんまりおおっぴらに言えないので、こそこそとしながらこっそりと気を許しあった者の間でだけ語られてきたと言ってもいいかと思うんですね。

わたしも、この話を聞くことがしばしばございました。そのひとつの体験をあげさせていただくとね、今から三十年ほど前になるんですけれども、とても夏の暑い日でした。わたしは、薬菜山の麓の宮崎の集落を歩いて、民話を語ってくださる方をもとめておりました。そんなふうにあてもなく歩いて、「覚

えている民話があったら教えてくださいませんか」なんて言って歩くという頼りないようなことをやっているわけなんですわね。

その日はとても暑かったもんですから、喉が渇いておりました。ひょいと見たら、一軒の家の庭の向こうに、こうやって手で押して水をあげるポンプが見えましたので、そこへいってお水をご馳走になろうと思って入っていきましたのね。

そしたら、縁側におじいさんが座って、その頃はまだよく見かけたんですが、煙管きせるを持ってこうやって煙草盆の縁をたたいて煙草を吸っておられたんです。おじいさんに、

「お水を一杯くださいな」

って言ったら、

「好きなだけ飲んでいけ」

って言われたので、好きなだけポンプを動かして水を飲んで、やおらわたしの本当の目的であります

「おじいさん、おじいさん。子どもの頃に聞いて覚えている話があったら教えていただけませんかしら」

って言ったら、おじいさんはとても困った顔されて、

「いやあ、忘れたなあ。子どものころにいっぱい聞いたけど、六十年も七十年も前のことだから」

おじいさんは、そのとき八十を過ぎておられたんですわね。

「七十年も前のことで、みんな忘れたなあ、忘れたなあ」

と、とつてもわたしのことを気の毒そうに見ておっしゃったんですわね。

そして、そのとき言われた言葉が忘れられないんですけれども、

「盗んででもこれるこつたら盗んできて聞かせてやるが、話ではなあ」

って、こう言われたんですよ。「物だったら盗んできてやってもいいけども、話では盗んでくることもできねえしなあ」わたし、こんな宝のような言葉を言っていただくことの有り難さを思わずにはいられないんですわね。それじゃあ、あんまり困らせてもいいけないと思って、わたしは、

「じゃ、ありがとうございます。水をご馳走さまでした」

って言って、おじいさんのところから離れて歩き出しましたら、そのわたしの背中に、

「むがあす、むがあす」

って聞こえてきたのね。なんだと思って、ひょいとおじいさんのほう見たら、おじいさん、縁側で煙管を持って、身じろぎもしないでちょっとでも動いたら言葉がどっかへ飛んでっちゃうことをおそれるみたいにしてこうやって、

「むがあす、むがあす、じんつあんとおばんつあんとおつたとねえ」

と語っていらっしゃるんですよ。はっと思って、わたしはまたあわてて後ろ向きになって、おじいさんのそばにいてしゃがんで、おじいさんの話に耳を傾けました。

おじんつあんとおばんつあんがあつて、ある朝、おばんつあんが豆っこ一粒拾った。おばんつあん、

「豆っこ一粒拾ったっけが、なじよすっぺや」

そしたら、おじんつあんが、

「んだら、まめご豆粉にすべ」

と言って、おじんつあん、それを畑にまくんです。で、

「来年豆とれたら、豆粉にすべ」

って言って、たちまち一年たって豆粉がとれたので、豆粉にしたんですわね。そしてね、さつき正子さんにも出てきましたけど、

「なにでふるうべや。ふるうもんがねえなあ」

正子さんにもふるいが出てきたでしょ、ふるいって言い方じゃなかったけども。だから、豆粉できるとふるうのね。そしたら、おじんつあん、

「なにもないから、おれの禰と取はずつ外して、それでふるうべし」

となって禰でふるうんですね。それで、いい豆粉ができるでしょ。そしたら、それを大切に、二人で、

「ああ、できた、できた」  
って喜んで見て、そのとき決まって入るせりふがあるんですね。正子さんにもありました。みなさんがお気づきかどうかわかりませんが、

「下さおけばネコかに食れんべし、棚かさ入れればネズミかに食れんべし、なじよしてしまうべや。では、ふたりの間さおいてねまんべし。あとつぎの間さ抱いてねまんべし」

って、こういうふうになるんですよ。

おじんつあんとおばんつあんのわずかな豆粉をねらってくるやつがいるんですね。それを象徴するかのようには、「下さおけばネコかに食れんべし、棚かさおけばネズミかに食れんべし」と言って、もうどこにもおきようがなくて、ふたりの間において寝るんです。

で、このとき、おじんつあんがね、「あとつぎの間さおいてねまんべし」って言われたのね。あとつぎってどういうことか聞いたら、「おじいさんは東に頭、おばあさんは西に頭で、こういうふうになってひとつ布団に寝るんです」って。このおじんつあんとおばんつあんは、いつもひとつ布団に寝ているんですよ。そして、夜中に屁をたれてしまうんです。

そうすると、おじんつあんがぶっとたれた屁が、おばんつあんのとこさおおばなしいってくつつくと、「ああ、いだましい、いだましい」って、おじんつあんがそいづきれいに舐めたんだとき。えんつこもんつこさけたって、こういうお話なんですね。

で、おじいさんは、これを話してね、

「はあ、おれはよく思い出したもんだ。よく思い出したもんだ」

ってね、自分のことほめていらっしゃるんですよ。「よく思い出したもんだ。よく思い出したもんだ」って。

そしてね、実はこの話を、わたしはあまりだいに考えたことがなかったんですよ。さきほどここへ上がっていたじじばばの話、「地藏浄土」も「ネズミ浄土」も、日本の民俗学の昔話の研究者の間では本格昔話といってひじょうに真つ当な昔話のジャンルに入れられて、それを研究したりする人も数は少ないんです。今、わたしの話したような話は表に出せないですから、ナンセンス、あるいは大話、笑い話という部類に押しやられていましたし、わたしもそう思っていたの。ああ、この話か、またと思うときがたびたびあったんですよ。正子さんが、「誰でもこの話しますよ」って言われたようにね。打ち解けてくると必ずこの話が出てくると、面白いんですけども、これは記録しても仕様がなかなと思ったり、もちろん絵本になどはできませんしね。どうやったらいいかしらと思ってね、この話出てくると、あら、またこいつ出てきたかと思ってたんですよ。

でもね、このおじいさんが、あんなにしぶり出すようにしてね、身動きもしないでこうやって語ってくださったですよ。本当に動いたら言葉が飛んじゃうかもしれないと心配されたかもしれないんですね。それで、わたしは、この話をとても有り難くいただいて、その日、あらためてこの話とまじまじと対面することになったわけなんですね。

そしてね、この日、とても偶然なのか、神さまがそうされたのかわからないんですけども、次に立ち寄った家にはおばあさんがひとりおられました。そして、そのおばあさんも、  
「子どものころ聞いてなんのことかわからなかったけども、覚えている話ひとつあんだ」  
って言って語ってくださったのが、この話だったんですね。で、この話は今ここに書いていただきました。みなさんにわかりやすくなるようにね。ちょっと読んでみますとね、

じんつあんとばんつあんがいたったづおんなあ、ほれ。  
こういう語りだったんです、このおばあさんはね。  
ばんつあんが土間掃くと、豆にこあ一粒ころころと転がってきたづおんな、ほれ。  
「いだましなあ」  
って、ばんつあん、そいづ拾まめて豆粉こっしやに拵かえだづおんな、ほれ。  
焙烙ほうろくでごろごろ煎こって、臼でごろごろと挽かいて、豆粉こっしやを拵かったど。  
その豆粉を見て、  
「戸棚さおけばネズミに食かれんべし、下さおけばネコに食かれんべし、じんつあんやあ、なじよすべや」  
って、ばんつあんが語ると、  
「ほだら、ばんつあん。ふたりで抱かいてねまっぺし」  
ここでもそういうことになるんですね、じんつあん言うから、その豆粉抱かいて寝たんだと。  
ほしたれば、ばんつあん、夜中に屁出かたくなって、屁、ぽーんとひったれば、その豆粉みな散らけて、  
じんつあんのどごさいったんだど。  
したら、ばんつあん、  
「じんじのへのこあ、うんめえなあ。うんめえなあ」  
って、そいつきれいに舐かめたんだどな。

今度は、おばんつあんが舐かめているわけですね。さっきは、おならをした後、おばんつあんをおじつあんが舐かめているんです。今度は反対になったんですよ。でもね、女の方が話してくださるのはとても珍しいんですけどもね。このおばあさんは、こういう話をされました。で、それだけじゃなくてですね、  
「四人目の子どもを身籠かもったときに、夫が戦争にとられて、そのまま向こうで戦死して帰ってこなかった」  
って。

「それで、四番目の子どもが夫に顔がひじょうに似ているので、四番目の子の顔を見て夫だと思って使かえてきたので寂かしくはなかった」

って、こんな話をまた民話の合間にしてくださったのね。

そんな話をまぜながら、この話を、わたしはもう一回手の中におさめてですね、そして、この話はいかったいどんな話なんだろうかと思ってながめ直すことにいたしました。

そしてね、この話は、みなさんにあげました資料にも三つ、栗駒の榎原村男さんの語り、それから小野田の小松仁三郎さんに語っていただいた話、それからもうひとつは伊藤正子さんと三つ載せて、三つの形を見ていただきたいんですね。とてもしっかりした骨組みをもっていて、どの話にもひとつの主張があるんですね。

ここで書いていただいたので、これを見ながら確認させていただくと、

「じんつあんとばんつあんがいたったづおんな、ほれ」

これは常套句ですね、日本の昔話は本当にどれもこれも、「むかし、おじんつあんとおぼんつあんがいてな」って言って、民話といえばおじんつあんとおぼんつあんからはじまると思うくらいに、この話がたくさんあるんです。さきほど小田嶋さんも言いましたけど、こんなことは日本だけなんですよ。ほかにこれほどに老夫婦を物語の冒頭において語る民話をもつ民族はほかにいないんです。そうすると、このことに、わたしたちの民族、あるいは先祖の独特な思いが隠されているかもしれませんね。そんなことを考えながら思うんですけども。

「ぼんつあんが土間掃くと」は、「土間」って書いて庭じゃないのね。家のなかにある、作業ができるたき。あすこを「土間（にわ）」って言うんですよ。「にわ」って言うと、間違ってお庭のことを思われるかもしれませんが、家のなかの土間（にわ）なんですよ。

そうするとね、「豆が一粒ころころと転がってきた」必ず一粒なんです。なんか胸がいっぱいになるけども。豆がころとひとにぎり落ちていたなんては言わない、必ず一粒なんです。そして、それを拾って「どうしようか」って言うの。

さきほどの小田嶋さんの話にもありましたが、大豆はそのままでは食べられないんです。噛んでもおいしくないですから、これを豆粉、きなこにするんです。そしてね、きなこに挽くときに、わたしがさきほど水をもらったおじいさんが、「なんでふるうべや」ここだけでしたけども、ふるう道具が必要だと言っていているわけなんです。で、ふるうものがないから禪でふるって行くんですけどもね。

こっちのおぼんつあんは拾ったら、焙烙でござろ煎って、焙烙っていうのは瀬戸の煎り鍋ですね、わかりますか。火にかけて煎ったりするでしょ。それを焙烙っていうんですけども、それはたいてい陶器でできているものだったんですね。そして、焙烙も出てくるし、臼でござろ挽いてって臼も出てくるんですよ。必ず道具が出てくるの。ふるいだとか臼だとか。それから、わたしはここもね、注意していきたいんです。民話のなかで人々は自分が新しい道具を使い出すと、必ずそれを話のなかに入れるんです。で、話が古くなればなるほど道具は素朴なものになるし、たとえば「猿蟹合戦」では臼と杵という道具が出てくるけれど、人間の発明した一番原初的な道具と言われておりますね。で、豆はそのままでは食べられないので必ず加工して食べる、そのための道具がいつもこういうふうに出てくるんですよ。

そして、もうひとつ決まり文句のように、「下さおけばネコに食れんべし、棚さ入れればネズミに食れんべし」って、つまりね、この心細いじじばばのわずかな豆粉をねらってくるやつがいるぞっていうことをここで言って、こういう言い方で言って、ここにどうしようもない二人の姿をこういう言葉で語るんです。で、みなさんにあげた資料の話にも必ず入っている。なぜか必ず入っているんです、この言葉がね。

二人っきりで老夫婦で暮らしている姿を、どんなに心細いかということを、こういう言葉で語るんですよ。すごいでしょ、ね。「寂しくて頼りになる者がいない」とかってそんなことは言わないのね。「下さおくとネコに、棚さ入れたらネズミに」狙ってくるやつを象徴的に必ず入れてくるんですよ。

そしてね、二人はもうどこにもなんの余力もないっていうことを言うかのように、「じゃあ、抱いて寝よう」っていうふうに、どの話でも抱いて寝るんです。二人の間に大切な豆粉をおいて抱いて寝るんですよ。

そして、夜中に大っきな屁をたってしまうのね。そして、おじいさんとかにくっついたりおばあさんとかにくっついたりして、それを舐めるっていう、なにか夜の営みを暗示するような、ものすごいエネルギーのなかでこの話は終わっていくんです。

前半で話した「ネズミ浄土」や「地蔵浄土」は、一粒の豆をとり逃がしてしまっ、そして浄土へい

った話だったんです。でも、こっちは浄土なんかいかないんです。生き抜いているわけですね。そして、一粒の豆を畑に植えて、さきの話のおじいさんは収穫したように、ほかの話では一粒の豆を半分にして、半分は種豆にして植えよう、半分は豆粉に挽こう、つまり「来年も生きるぞ」っていうことを「種豆にしよう」ということですね。そしたら、島津さんが、「半分にした豆でも芽が出るんですよ」って、実験して持ってきてくださったんです。回すので見てみてくださいね。だからね、半分にした豆でもちゃんと芽が出てくるんですよ。すごい生命力ですね。そして、半分にした種豆が実ってきたわけですね。

そして、わたしはこんなふうに話が展開していくこっちの方の小さな話ですね。誰も取り上げようとしない、できればちょっと脇へおきたいようなあんまり品がよくもないし、なんかわけわかんないような話であって、研究者もほとんど相手にしてくれない話なんですけども、わたしはここに潜んでいる人々の思いの強さといいますか、深さというものをやっぱり見逃してはならないと思うんです。

これは、このような本になることはありませんし、こういう取り上げ方はされない、いわば陰の話ですけれども、ここには生き抜くための人々のエネルギーの力とでもいいますか、そういうものが潜んでいるのを感じるんですね。

ここですね、ちょっとだけ方向を変えまして、さきほど小田嶋さんが言われたように、日本の昔話はしょっちゅう「むかしあるところにおじんつあんとおぼんつあんがあつて」と出てくるけれども、この人たちは二人きりなんです、たいてい。息子と暮らしていたり、それから、孫がいたりほとんどなくて、二人で暮らしていると語りはじめられていますね。そして、二人ということにひとつの意味をもたせているような気がします。

それでは、二人でいるおじいさんおばあさんが暮らした世の中とといいますか、当時の社会、さきほども藁の話なども出ておりましたけれども、それはどういうものであったかということ、物語というよりは採訪にいきますと問わず語りに聞かせていただくんです。そのことをちょっと申し上げてみたいと思うんですけれども。

一番はじめに、おじいさんおばあさんのことについて、松谷みよ子さんがひじょうに興味深い文章、短い文章ですけれども書いておられます。松谷みよ子さんは、みなさんもご存知のように、童話作家として国際アンデルセン賞を受賞されると同時に民話の分野でもひじょうに独自ないい仕事を残してくださったんですけれどもね。

松谷さんがこんなことを書いておられるんですね。「ふるやのむり」っていう話をご存知ですか。今回出てこなかったけど、「ふるやのむり」も、おじいさんとおばあさん二人っきりで暮らしているんですよ。そして、馬をもっているんです、この二人は。そうすると、その馬をねらって、オオカミがやってくる、それから泥棒もやってきているんですね。そして、その晩は雨がしとしと降ってきて、二人がなにか話しているんですよ。で、聞いていると、

「おじんつあん、この世でなにおっかねえや」

「おれはなあ、オオカミ一番おっかねえなあ」

なんて言ったり、それから、おぼんつあんが、

「おれ、なにおっかないっていったって、ふるやのむりよりおっかないものねえやあ」っていうの。「ふるやのむり」ってなんだと思うでしょ。むかしは茅葺きの屋根で、その屋根から雨が漏ってくる。「これが一番おっかねえ」っておばあさんは言ったのね。

で、それを聞いていた泥棒とオオカミは、

「なんだ、おれたちよりもっとおっかないやつがいるんだ。ふるやのむりつうのはなんだ」  
って言ってたんですよ。

そしたら、「あっちもむりむり、こっちもむりむり」なんて古い家で雨が漏ってきたんでしょう。古い家なので、おじいさんとおばあさんが、雨を受ける物を持って「あっちも漏っている。こっちも漏っている」なんてやっているわけですね。それをすっかり誤解してしまったオオカミと泥棒は、お互いを「ふるやのむり」だと思ってたかかってという話なんですよ。

これ、話すまでもなく、みなさんご存知の有名な民話ですけど、「ふるやのむりおっかねえ」というのは、茅葺きの古い屋根が壊れてしまって「雨が漏ってくるのが一番この世でおっかねえ」と話しているの、二人がね。

それで、松谷さんは偉い人だと思うんですけども、「東北の村へ探訪に出かけたとき、屋根葺きの話を聞きました。屋根葺きという大事業は、萱刈りからはじめて実に多くの労力を要します。それは「結い」というものがあって、そのときどきに労力を出し合うというものでした。

「それでは、屋根葺きに出られないじじばば二人暮らしの家はどうなるのですか」と尋ねた。すると、「結いには入れない」という言葉が返ってきた。わたしは愕然としました。「ふるやのむり」という話のおそろしさを悟ったのです。萱が次第に腐って穴があいていくと雨漏りがする、しかし、貧しいじいとばあは屋根を葺くこともできずに呟く、「オオカミや泥棒よりも雨漏りがおっかない」と。わかるでしょうか。

ご存知のように村落共同体のように米作が中心の生産の形態のなかでは、結いという組織があって、お互いになにをするにも結いでおこなってきたんですね。屋根が壊れればまた結いで、「こちらの屋根を手伝ったから、じゃお前の屋根も手伝うよ」というふうにして共同の暮らしが営まれてきたことは、みなさんご存知のとおりです。

でも、そういうなかで、「じじとばばと二人きりの家では、二人が年取って結いに出ていけなくなったときどうなるのか」と松谷さんが聞いたら、「まぜなくなる」と言われたっていうんです。

実はわたしもそれを聞いたことがあるんです。次第に遠慮して、そのじじばばは、村の外れから山のほうへ移っていったるべく迷惑にならないようにすると同時に、村のほうでも次第にまぜなくなっていくというんです。ですから、「ふるやのむりはなによりもこわい」というのは、村にいながら村の仲間に入れなくなってしまう、山にいかなければいけなくなったじじばばの呟きだということになるわけなんです、この話はね。

そして、これは松谷さんじゃなくて、わたしが県南のほうで聞いた話なんですけれども、「この村にじんつあんとばんつあんがいて、そして、二人で一生懸命に守ってきた田畑だったが手に負えなくなったんで、それ手放して村里から山の際へと移っていったよ」と話してくださるのね、その人ね。それで、

「しばらくいってみないから、どうしているかなと思って、山へ移っていったじんつあんばんつあんのところを尋ねていってみたら、掘っ立て小屋みたいな建てるでそこで住んでね、いたわけですけども、二人で首を吊って死んでいた」と言うんですよ。

「そしてね、首のここからすんと胴体が落ちて、下に落ちた胴体が胡座かいていたんだよ、向き合ってた」

そして、これはもう笑うしか仕様がないうて、語ってくださった人は、「あはははは」と笑われたんです。でも、とてもこわい話でしょ。でも、あつた話なんですよね。二人のじじばばが田畑を捨てて山へ移っていった、山へ移るということに意味があるんですね。

さきほど小田嶋さんが山の際にいくつてまとめてくれたけれども、こんな言葉もお聞きになったこと

ないでしょうか。「食えなくなったら里のお婆のところさいくな。山さいく」って、これを格言のようにして守ってきた人がいました。里のお婆さんのところにいくと面倒くさいし、決して助けてくれない、そんなことするなら山へいけ。山へいったら、木の実もあるし、草も生えているし、罌をしかけたら兎の一ぱもとれるし、山でならなんとか食べる。ですから、山はある意味で命の再生の場だったんですよ。ですから山際へ移っていくじじばばの姿というのは、わたしは死の国へ近づいていったじじばばというよりも、むしろ命の再生をめざして山へ入っていったという姿として語られることが多いのではないかと思うんです。

多くのじじばばは、山の際に住んでいるんですよ。今度話を聞かれたら、そこを注意していただきたいと思うんですけど、山の際に行く理由がきつとなにかあるにちがいないんですね。

そして、わたしが今話したこわいような話ですね、山へいっちゃうともうみんな忘れちゃって、尋ねてもいかないんですね。いってみると、「雨漏りがひどくて、せっかく首を吊ったのに首根っこまで腐って、そしてぼとんぼとんと胴体が下に落ちてそいつが胡座かいて向き合っていたぞ、あははは」こういうことになるんですよ。とてもこわいけれども、なんともいえない姿ですよ。

そういうような現実を目の当たりにしながら、人々は昔話をつくり上げてきていたんだということも忘れたくない。そして、じじばばを山際へ山際へと追いやっていくこの話の経過も、わたしは心においておきたいと思います。

それからですね、さきほども柴を刈るというお話も出てきましたけれども、これはつい二、三年前なんですけど、丸森にいきましたときに、一人のおじいさんが、「若い頃山仕事をしていた」と言われたので、どんなふうにそれをされていたのかを聞いたことがありました。

「おれたち山の暮らしは、山の持ち主の旦那殿から、どこからどこまでと範囲を決めて山を借りる、借り入れる金と手のある人はどっさり借りるし、金のない者手のない者はそこからここまでというくらいの小面積しか借りることができない。借りた山で木を育てて、それを伐って材木として運び出す。その材木を売った金でみな食っていたんだ。たいへんなのは、伐った大木を麓まで引きずって下ろす作業だ。細い山道に大木をねかせて、縄をかけて、何人もで調子をあわせて引っ張ってくるんだ。急勾配の細い山道に沿って大木を引くのは命がけの仕事であって、一人ではできないから誘い合って二人三人でするんだ」

って、こういう話を聞かせていただいたんです。つい二、三年前のことです。

それで、わたしは松谷さんのまねをしまして、

「じゃあ山の持ち主から山を借りることができない年寄りや子どもはどうするんですか」  
って聞いたんですよ。そしたらね、

「山の持ち主から山を借りることができない年寄りは、山へ入って柴を刈ることだけは許されていた」と言うんです。山の面積をもらって、そこで育った木を売ったりする才覚はないけれども、生えてくるひこばえの柴を刈ることだけは許されている。しかもですね、それをいっぱい刈って家に積み上げていることは許されなかった、ただで刈らせてもらうので必要なだけ刈っていく。だから、じじばばは、毎日柴を刈りにいかなければならなかった。

わたしは、これを聞いたときどきとしましたね、やっぱり。「むかしあるところに、おじいさんとお婆あさんがあって、おじいさんが山へ柴刈りにいきました」という、この「柴刈りに」という言葉のもっていることを、この丸森の方から教わったような気がしました。それで、年寄りで山仕事に加われない者は、毎日柴を刈りにいく、しかも毎日いかなきゃいけない、刈って積んでおくことは許されないことだったって言うんです。すごいでしょ。どうしてかと思うんですけども、山の主はそれを許さなかつ

た、そのかわり柴はただでくれてやるから毎日刈って持っていけというので、必要なだけそれを刈ってね、持ってきたんだそうですよ。

だから、「山へ柴刈りに」という言葉がもつ意味の大きさというものは、またきつとあったんだろうと思います。そういうふうにはですね、老夫婦は共同体のなかで、みなさんもご存知のように、日本の特に農村の共同体組織とうものはがちりしたものでしたね。そして、それに従わないってことは、ひじょうに生きずらい道を歩いていかなければならなかったわけですが、力もなくなり結いに出ていくこともできなくなったじじばばたちは、自ら山へ移っていき、そして、山で暮らすことを余儀なくされ、そこで生き抜いていったと考えてもいいかと思うんですね。

それでね、いつでもなんで「一粒の豆」なんだろうと思うんですね。いつでも一粒の豆なんですよ。それじゃあ、一粒の豆に象徴されるものは、いったいなんなんだろう。一粒の豆は、なにを象徴していると思われませんか。

一粒の豆なんです、出てくるのがね。時代が下ったり、それから、場所が違ったりすると、豆じゃなくて、それがだんごだったり、おにぎりころりんっておにぎりになったりしますが、宮城県のひじょうに古い村々をまわって聞く話では、いつも一粒の豆なんです、出てくるのがね。で、その一粒の豆をどうしたという話になるんですが、なんだと思われるでしょう、一粒の豆っていうのは。

わたしはですね、この一粒の豆というのは、おじいさんとおばあさんに残された最後の食べ物を意味するんじゃないかと考えるようになりました。

つまり、一粒の豆をじじばばが持っていた最後の食べ物というふうに考えますと、それをネズミ穴に落として追いかけていった人は、最後の食べ物を失って、一般的な言い方をすればあの世へいったという言い方をしてもいいんです。そしてあの世へ行って幸せをたくさんつかんだ、そういう言い方でなければ、一粒の最後の食べ物を見失って、ネズミ穴や地蔵さまのところに行ったじいさんばあさんは、そこへ行って命を落としながら、しかし命を再生させた姿として、あの地蔵浄土やネズミ浄土が語られていたのではないかという気がするんですね。ですから、全部ハッピーエンドでしょ。わたしが話しているのと違う前半のほうで出てきたじじばばの話は、みなさんはよく吟味してください、例外なくハッピーエンドなんです。もう明日死ぬかもしれない山際に住んでる心細いじじばばと言って語りはじめながら、いろいろ紆余曲折があって最後は宝物をもらったり子種が授かったりして、必ずハッピーエンド。で、冒頭には、もう命が短くなったじじばばをおき続けてはいる。ですから、先祖たちは命の喪失と、そして、その力強い再生を物語に託したんじゃないか。そのことが、「むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんがあって」という語り言葉になって出てくるのではないかなあとひとつ思います。

そして、わたしが取り上げてきましたこちらの話は、一粒の豆を落とさないでにぎっちゃったんです。にぎった人は、「来年も生きるぞ」と、それを畑にまいたりするんですね。そして、二人で道具を使って、そのときの道具を使ってというときの意味も大きいんですけども、道具を使って加工するんです。手に入れたものをそのまま口に入れるんじゃなくて、加工して食べようとしている。そして、それを狙いにくるやつを我が身でもって防いで、二人が抱き合って寝て、そのまん中に豆をおく。それが屁で吹っ飛ばされてというふうになって、「この老夫婦はもしかするとこのことで子種が授かるかもしれないね」と言った人もありました。でも、そんな可能性さえ感じさせるような結末で、ひじょうにリアルで、生き抜いていく話が「一粒の豆」という形でもうひとつ用意されているんです、浄土話のほかに。

浄土話のほうは、一粒の豆を見失ったじいさんとばあさんと語り出されていきましたね。いって見て、そこで宝物をもらって帰ってくるわけですよ。それに対してこちらの話は、一粒の豆をにぎりしめた。半分にして種豆にしよう、つまり、来年も生きるぞって思ってるんですよ。そして、夜のエネルギー

ユな営みを暗示するような、笑わせてくれるような結末を導いて、人の命の逞しさと力強さみたいなものを描ききって、そして、地蔵浄土やネズミ浄土の脇に陰のようにこの話をおいてきたんです。

この話は、おおっぴらにできない語りであって、なかなか難しいものをもっているんですけども、地蔵浄土の話の脇にこういう話がおかれていて、そして、先祖は、年寄り夫婦で物語をはじめることによって、生と死、それから死と再生といってもいいかもしれませんが、それを心に描きながら、じじばばの昔話をつくり、語ってきたのではないかという気がしております。

それじゃちょっと舌足らずもあったりしましたけれども、あとは質問のなかで受けとらせていただくことにして、わたしの「一粒の豆をめぐるじじばば」ということについての話は、ここで終わらせていただきます。採訪者として見聞きしたもののなかからしぼり出してきたものでございます。不十分があったらお許しください。

## 7. みなさんと感想や意見の交換 その二

参加者の皆さん

小田嶋一 ありがとうございます。前半ででてきたさまざまな問題と、いま話題提供していただいた話が、いろんなところで、結びついたり絡みあったりしていたと思います。そうした前半の問題も含めてですけど、「一粒の豆とはなにか」ということでもいいし、あるいは「浄土の世界とはなにか」、それからじじばばの二つのお話が光と影のようになっているという、そういうことについてでも、みなさんなにか、質問でもよろしいですので、まずどなたか

参加者一 いまのお話、意味が深いんだなというふうに、たいへん感動的にお聞きしました。それで、民話っていうのはほんとに奥が深いんだなっていうことを痛感させていただきました。が、ただ前半に疑問があった、米が出てこないという、日本の民族の基本は、わたしはやっぱり米じゃないかなというふうにも考えたんですが、それでは無理があるような感じがしまして。わたしいまちょっと浮かんだのは、米の社会というのはやっぱり、とくにわたしらに印象的なのは、徳川時代、あるいは戦国時代の封建社会のことが非常に頭の中にあって。ところが民話っていうのは、やっぱり一般大衆のまずしい民衆の物語がずーっと伝わってきて。で米の話になると、やっぱり封建時代の厳しい生活のことが出てくるものだから、それを避けてきたんではないのかなあ、というようなことをちょっとね、思いつきだかもしませんが。今のお話だとですね、主張がある、大衆には主張がある、言いたいことがある。しかしその言いたいことをですね、言葉にはっきりした形では出さなくて、庶民の、あんまり飾らない自然な形で語られていて、そして民話にはいろんな変化があって、たとえば豆一粒にしても、いろんな物語を、それぞれの大衆が、自分なりに解釈して、あんまり飾らない言葉で語っている。今の方のお話から、わたしはそうゆうふうに推測したんですが。その米の話については、わたしの中には、やっぱり米が出てこないというのはどうなのかなあと。わたし、百姓の子なものですから、米を作るにはね、八百なんぼか

のね、手がかかるってことを強調されてますよね。民衆だったらその話は必ず出すんじゃないかと思うんだけど。それでも、わたしのあれでは、米のお話が出てこないっていうのは、どうなのかなあと。まあ、雑駁な話になりましたが、とにかくいいお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

小田嶋—ありがとうございました。

小野—あのやっぱり、米はですね、新しいんですよ、豆にくらべると。そして米を作る社会は共同体、村落の共同体が形成されないと、とりかかれない、ちょっと組織的な要素が必要で。そのかわり、結（ゆい）とか、共同がさかんに言われるんです。ですから米が出てくる人たちの暮らしを民話はあまり語らないんです。その人たちはある意味では、社会の中で恵まれて暮らしている人たち。そこからはずれて、米も作れなかった人たちのところから発想するのが、民話の一つの特徴でもあるわけなんですね。そんなふうに、わたしは考えておりますけれども。また、教えていただきたいと思います。

小田嶋—ありがとうございます。とっても大事な問題かと思えますけど、まだほかの方のご意見もあるかと思しますので、では次の方のまずお聞きします。

参加者 J—小野先生、どうもありがとうございます。京都立命館大学から来ました山本です。わたし心理学やってるものですから、その豆っていうのがね、この年寄り夫婦を象徴していると思うんです。つまり痩せた土地に投げ出される、痩せた土地で育つ、だから豆が生き残るか、失うかで、まさに小野先生おっしゃったように、生死がかかっていると思うんです。そこが言いたいところなんです。「なぜ豆か」ということを問うたときに、もう手がかからなくても、痩せた土地でも、ほとんど捨てられても育つ。一縷の望みはそこで育つことじゃないかなと、そうゆうふうに考えました。

小野—いいご指摘をありがとうございます。

小田嶋—ありがとうございました。いまの方も、「豆が象徴的に描かれている、語られている」とおっしゃいましたし、最初の方も「語り方が、言葉で直接いうのではなくて、なにかお話の中の物や事で象徴させて語る」という、それも一つの民話の語り口なんだろうと思います。一粒の豆の話っていうのは、とくにそれがよく表れているお話じゃないかなあとと思います。その象徴をどんなふうに、それぞれが考えるかっていうことは、とっても昔話にかかわる大事なことかと思えますけど、ほかになにか…「わたしはこう思う」という…

参加者 K—どうもありがとうございました。いまのお話ですと、民話のパターンでは、マージナルな人々の物語だと。社会からはずれた、共同体からはずれた人々を語っているというパターンがあるとおっしゃいました。一つ疑問に思ったのは、この伝承した人たちってのは、このコミュニティ、共同体の人たちですね。そういう人たちが、その共同体のマージナルといえますか、そういうところにいる人のことを語り継ぐというのは、どういう動機なのかなと。いま思いついたのは、後ろめたさがあるのかなと。どうなんでしょうか。

小野—あの、はずれたっていうよりは、なんていうんでしょう、底辺にある人たちを物語の中心に据えようとしている気配はあるんですね。そしておっしゃられるように、語ってきた人たちは、以外に裕福な農家のおばあさんだったり、おじいさんだったりするっていうことが、あるんですけども。たんに、そういう貧しいか金持ちかっていうことを超えた、一つの真実が物語には込められているから、今日の世に語り伝えられるんじゃないかと思うんです。さきほど、ちょっと説明足らずのまま、もうしあげましたけど、一粒の豆の話は、わたしは生と死、それから死と再生ってという思いが込められていると思うんです。そうするとそのことはもう、貧しいか貧しくないかを超えて、みんなの共通の問題にもなってくるかと思うんです。そういう共通の広がりをもちながら、民話は語り継がれてきたんではないかなあと思います。たとえば、いま民話を語ろうとする方がとてもたくさん増えて、子どもたちに民話を語ろうって運動が、起きていることもあるんですが、その方たちが、じゃあ貧しい人たちかっていうと、貧しくないんですね。苦勞のない人たちが、悪い言い方をすれば、ひまだからやってるみたいなの、ね、そういうことだってありうるわけなの。でもそれは、語るべき話の中に真実があるから、そしてそれが、明日を生きようとする自分にも、なにかを示唆してくれる喜びがあるし、その言葉は、ずっと向こうから先祖が、ほそぼそと伝えてきてくれた言葉であって、それがいま自分のところまできているってという喜びで受けとめたいってことも、あるんじゃないでしょうか。ごめんね、説明になるような、ならないようなことで。

小田嶋—ありがとうございます。わたしは、後ろめたさというよりか、現実を生きている各時代の人々が、自分以外の人々のさまざまな生きざまを、つねに見ているわけですね。それを、自分がどうであるかということもあるけれども、自分と同じ世界を生きている人々の、いちばんはずれてしまった人々について、覚えておく、ちゃんとそれと向き合っておく、ということの一つの表現ではないのかな、というふうに感じました。

あとなにかありましたら…ではまず後ろの方から。

参加者 L—わたしは、いまの方の質問ともちょっと関連しておうかがいしたいと思うんですが。昔話について、教訓ということが、昔話の語り継がれることの意味なんだろうなって、漠然と思ってきたんですが、いまのお話を聞いて、非常に重い意味がそれにこめられているってことを感じまして、非常に目が覚めた思いでいるんですけど。それであらためて、なぜ語り継がれるのか、継がれてきているのかってことに、ポイントを当ててもう一回考えてみると、教訓、誠実に生きる、そのことの大切さを教訓として伝えるっていう中身はあるんですけど、お話にあった結に入れない老夫婦の方々の結末っていったらおかしいですけど、浄土に生きるってことについて、それを願うっていうのか、ある意味で、結に残って豊かな暮らしをしている人々が、おじいさんおばあさんのことを語り継ぐ。結局は、「浄土に生まれていたんだよ」「最期は幸せな気持ちでいったんだよ」という願いでいいですか、ちょっと言い方違うかもしれませんが、鎮魂の願いでいいですか、そういったことがこめられているのかなあ。それで語り継がれるために、ユーモラスなたとえとか、そういったものを織り込んでやっていると。そうした語り継がれる工夫をしながら、伝えていって、結から離れたおじいさんやおばあさんたちの、浄土に生きていくという鎮魂を願うっていう、そういう意味がこめられていたのかなって感じがするんですが。わたしの感想をふくめての意見でございます。

小野—ほんとに、そのように考えていいかと、そのように考えられるべきかとゆうふうにさえ思います。そ

したらですね、もすこしわたしは、語ってきた人たちは、老夫婦を冒頭に据えた展開の中に、積極的な意味も持ってたのかなあとと思いますのは、例えばですね、「花咲か爺さん」を思い出してください。最初犬を飼っていますね。その犬を隣の爺婆にとられますね。そして殺されちゃうんですよ。そうするとその犬を埋めて、そこに松の木を植えます。そしてその松の木で、臼をこしらえますね。そしてこんどは、その臼がまた燃やされてしまうと、今度はその灰を集めてきて、そしてその灰で、枯れ木に花を咲かせる。ですから花咲か爺さんの物語を読んでいると、聞いていますと、次々とあらたなものを生み出していくというか、命をつないでいくっていうような印象なんですね。最後に枯れ木に花を全部咲かせてしまった、という結末になってくると、よけいそう思うわけなんです。ですから、「むかしむかしあるところに、おじいさんとおばあさんが…」で始まる物語には、非常に深い、積極的な意味もあると思うんです。その証拠に、そのおじいさんとおばあさんを、かならず幸せにするんです、物語では、いろんなことをこめて、思いをこめて。そこに、やっぱり、それを語り継ぐ人の共感する思いもあったんでじゃないでしょうか。ていうふうに思いますし、わたし自身が語りをするときには、そういうような気持ちにさせられたりすることもありますね。

小田嶋—ありがとうございます。とてもお話が深いところまでいくような感じですが、もしそれについて、ご意見がある方ありましたら…

参加者 M—わたしはちょっと、前のお米のかかわりで感じたんですが、これで調べたら、やっぱりみやぎの民話ですよ。全国の民話で、やっぱりいろんなものが、たとえられてると思うんですが、やっぱり豆っていうのは、さきほどおっしゃられたように、やせこけた土に生えてくる豆ですよ。稲はもっと南だと思うんですよ。わたし、ちょっと前に北海道にいたんですけど、お米ができるまで、ものすごいたんへんな苦勞して作った人が、いるんですよ。田んぼに、お湯を沸かして、凍らないようにして、やっどできたっていう。いまはね、北海道もお米、おいしいのとれます。宮城ももちろん東北もとれますけど、むかしの東北って、それほどお米はとれないんじゃないかと。だから、宝物なんじゃないかと思うんです。だから、よくお話に出てくるときに、地蔵さんになにかいいこととして、目が覚めたら俵が土間（にわ）にあったとかね。だから、お米っていうのは、そんなに簡単に手に入るものではなかったんじゃないかなと思います。だから、それで豆だったのかなって。そして、豆っていうのは体に必要なものですよ。それがいちばん象徴的で、聞いてて、わたしは、ほんと思ったんです。納得したんです。あと爺婆じゃないんですけど、自分も年取ってきたらどうなんだろう、といまでも思うんですけど、『檜山節考（ならやまぶしこう）』じゃないけど、六十になったら山に姥捨てじゃないけど、行きますよね。それがなんか、ひっかかって、「あ、そうか、東北の爺婆は、やっぱりすごいな」と感じたんです。なんか生命力がね、東北の人たちって、あるんじゃないか。わたしは震災の時にいなかったんですけど、復興じゃないんだけど、それを逃げないでね、次に行こうとしている力を、やっぱり感じますね。だからこれなのかなって。ほかのこの民話よりも、東北の民話はすごいなって、感じました。

小田嶋—ありがとうございます。米というのは、やっぱり出てこないですよ。ね。「おにぎりころりん」という、おにぎりをころがすという話は、ほんとになくて、「ねすみ浄土」でも「地蔵浄土」でも。なぜか豆なんですよ、宮城の場合ね。おそらく、宮城も岩手も青森もそうですが、三年か四年にいったん凶作のあるような、非常に厳しい自然の中で、米を作り続けるということは、非常に大変なことですし、江戸時代の場合、農民は米は食べられずに、雑穀と豆で栄養をとっていたのがほとんどだと思うので、米へ

のあこがれというのは、一面であったんじゃないかなと思います。あとなにか…じゃあ、順番に行きますので。

(女性) 今回は豆がテーマですので、米の話になりますと、「節分の始まり」や「サルの嫁ご」の昔話になりますと、お米がでてきて、お米がでるとね、こんど水争い、水争いが出てくるんです。その水争いに、こんど娘が巻きこまれるというような昔話になりますので、またそのテーマになると、またいろいろ変わってくると思います。

小田嶋—たしかにそうですね。そうすると、ムラの共同体の問題がからんでくるお話になりますよね。ありがとうございます。

参加者 N—小野先生の解説が、ほんとに素晴らしくて、奥深くて、なんか涙がでて。わたしは簡単に、「なんか子どもたちが喜ぶから、民話を語ればいいのか」って、ほんとに軽く思ってたのに、生と死、そして死と再生、願いと祈りをこめながらっていう、すごい深い思いが、今日ほんとに、近い席にいたので、ひしひしと感じて、これは無料ではだめだな、とっても感動いたしました。ありがとうございました。面白かったです。(拍手)

小田嶋—ありがとうございました。つづきまして、手を挙げてくれた方は…

参加者 O—すごい盛り上がった後に、話を戻して申しわけないんですけども、たぶん根源的なお話みたいなところにたぶん戻るかもしれないんですが、ぼく、今日しかお話聞いてないんです。今日のはじめてきました。宮城の民話を聞くのも、初めてです。豆に限定されているんだみたいなことも、今日知りました。いろいろに結のお話だったりとか、そこから想像される昔の風景だったりとか、状況みたいなことも、聞きながら…

小野—お顔見せてください。

参加者 O—あ、ここにいます…簡単に言うと、「まずしさ」と「きびしさ」みたいなものがあるなと思っていて、「貧しさ」というのはおそらく、質問される方だったりとか、解釈される方から出てくるお話で、民話そのものの中には、きびしさしかないのかな、というのが私が聞いていた時に感じたところなんです。なので…っていう感想が一つです。そこからわたしが思ったのは、きびしさに対して、このまずしさという、なにかと比較してまずしいという解釈をもっていく、そうゆうに考えるのも自由だと思うんですが、語り継がれてきた理由みたいなものは、ときにきびしさに対して、人間がどのように生き抜いていくか、個人がどのように生き抜いていくか、の方法がそこにある気がしているので、なんでそこに裕福になりたいとか、いままずしさから脱却したい、みたいなことは考えずに解釈できたらいいんだろうなというのが、きょうお話聞いてて思ったところです。はい、伝わったかどうかわからないんですけど、きびしさとまずしさみたいな話です。

小野—いまおっしゃったことも、とても大事だと思うんですね。その、なにかの教訓を引き出したり、貧しさに抵抗する力をつけようとか、そういうことと同時に、物語を語る楽しさ、その物語をなんとはなし

に受け止めていくうれしさ、そして物語が形成してくれる世界のとても言葉にできないような豊かさ、そんなものがあって、今日まで民話は、形をとどめながら民話は、語り伝えられてきているので、そこにたくさんの思いがこもっていることを、わたしたちは理解して、語り伝えていくことができれば、もっとすごくいいなあというふうに思うんです。ありがとうございます。

小田嶋—ありがとうございます。あ、はい。

参加者 P (柴田民雄)—深刻になっていくようなね、話にもなると思うんですけどね、言葉が立ち上がってくる、集団で立ち上げるというか、もちろん、語り手がいて、聞き手がいるわけですけども、やっぱりそれは面白いんですよ。面白いんですよ。言葉で空想する、想像するというのが、とてつもない面白さがあるんですね。だから、根底には、そういうものがあって、その上に、いろんな貧しさとかきびしさとかあるんでしょうけども、言葉が立ち上がってくる、その空間にですね。そこにいた人たちだけの、だけの面白さっていうか、これが連綿と続いてきたんじゃないか。やっぱりそこには言葉、言葉っていうふうなもの、すごさも、ひとつ、民話は、わたしたちに教えてくれると思うんです。そして、小野さんはよく言うんですけども、「方言は日本語の根っこである」、いうふうに言われてきました。まさに、そこに、言葉の根源みたいなどころから、いろいろ派生してくる。でも、根本的には面白い。なんかわくわくする、どきどきする、泣いちゃう、怒る。そんな感情を、豊かにも再現してくれる。そうやってわたしたちの先祖は生きてきたんじゃないか。それを大事にしてわたしは語っていききたいなあと思っています。

小田嶋—ありがとうございます。語りの場の豊かさとか面白さとかと、その中に含まれてる、象徴的で直接には表さないんだけど、生きるか死ぬかの切羽詰まったところを生き抜いてきた人々の思いみたいなもの、じつはそこに隠れているんじゃないか、ていうことを考えるだけでも、なにか民話についていろいろ深いことを、聞くことができるんじゃないかなと思います。あと、ぜひ言っておきたいこと…

参加者 Q—すいません、遅ればせながら参戦したので、ちょっと今までの話とずれるかとも思うんですけど、わたし、東北の田舎の育ちなんですね。そして小さいころ、おじいちゃんおばあちゃんていうと、もう四十代でいい年で、じいちゃんとおばあちゃん二人暮らししてるってのが、当たり前環境でいたんで、おじいさんおばあさん、絶対山に行かなきゃいけないって感覚もないし。たしかにもう四十代で二人暮らしって感じが多かったので、この場合の、おじいさんおばあさんの年齢って、どのぐらいを想定してるのか。それこそね、「恥かきっ子」って言ってたんですけど、いい年で子どもが生まれたから、それは若夫婦の子どもにするってことも普通にありましたし、難しいなと思いながら聞いてたんですけど。ここから年寄り、とされる年齢は、時代によって全然違いますよね。むかしは四十代になれば、りっぱなお年寄りなんだけど、いま四十で年寄りつつたら、もうとても叩かれることですので。そうするとこの世界自体が、ちょっと変わってきちゃうかなと。そういう気がしてるんですけど、すいません、ご意見を聞かせていただければ。

小野—四十で隠居部屋で隠居して、もう田畑の仕事にも出ないということが許された人たちは、かなり恵まれてたと思うんですよ。わたしどもがお会いすると、九十で死ぬまで米背負って働いてた、泥背負って働いてたとか、そういう話もたくさん聞きますので、もしかすると、ご自分のおじいさまおばあさまは、

四十で隠居されたけれども、そのことを全体の中にあてはめることは、ちょっとむつかしいかなと思うんです。そういう爺婆もいれば、やっぱりいくつになっても、身を粉にして働かなければならなかった爺婆もいるし、たった一人で死んでいった爺婆もいるし、爺婆二人きりになって、みんなに見捨てられて、さっきちょっと例をあげましたけど、首吊らなくちゃならないような生涯の人もいたりして、そういういろいろな生き方があったことを、民話は手を変え品を変えて、語ってくれているように思いますね。だから、この時代は何歳ぐらいとかっていうふうに、あまり考えなくても、勝手にそれは受けとめてもいいかなあなんて、わたしなんかは思うんですけどもね。

参加者 R—ありがとうございます。ちょっと自分、個人的に気になっていたところで、ちょっとまた話が戻ってしまうんですけど、「一粒の豆」の話もそうなんですけど、物語のたとえばさっきお話に出たみたいに、共同体の教訓として、マージナルな人たちを語るっていうようなものだけじゃない響きが、やっぱり物語として立ち上がってくるっていう感覚がありまして。やっぱ物語はだれも見捨ててない感じがして。マージナルな人たちが逆に、そういう共同体自体を、問うような目線も最後に起こる気がどうもしてて。なんでしょ、「道具」っていうふうに、さっき小野さんが、民話の中には必ず出てくるようなものが、古くなればなるほど、質素になってくるって。道具っていうのも、人間の社会の中で、生きてくってことの象徴に、やっぱり選ばれてるような感じがして。それがたとえば豆の話だと禪になっていたり、ほんとに、最後の最後の食べ物という象徴と同時に、社会の中で結からはずれて、爺と婆になって、ほんとに生命的に終わりを迎えるだけってタイミングで、そこで艶話的なところから生がもう一回湧きあがってくるってことは、ある種さっき共同体からはずれた人が山際に行くっていうものといっしょで、社会から解放されて、ほんとに生命として人間をまた歩みなおせるみたいなのを、同時にすごく感じるっていうか。共同体がそういう後ろめたさもあるかもしれないし、いろんな人たちのどちらともいえない感情を、両極から物語として語っているから、すごく根源性の、絶対だれしもが行く道ってのが映っているような感じがして。なんで、個人的には当事者性みたいなのも、結構強いんじゃないかなという感じがしました。じじとばばの、もうどうしようもない最期のときに、最後、艶話になったりとか、あとやっぱり、最期に立ち上がるユーモアみたいなものが、すごいリアリティを孕んでると思いました。ありがとうございます。感想でした。(拍手)

小田嶋—ありがとうございました。いまの方の、周辺の者たちから、中心の者たちを見る視線というか、その対抗する、対峙するような視線もあるんじゃないか、ていうお話は、すごくいいことを言っていたいなあと思います。で、わたしは、じじばばが山際に行き、山に入っていくということは、たとえば「オオカミのまつげ」という話で、男が世の中が嫌になって山に入っていくのにも通じて、もう一つの生き方みたいなものを、ある意味示唆しているのかもしれないなど、ふといま感じました、はい。あとなにか、ありますか…はい。

参加者 S (山田和郎)—わたし、小学校の教師をしております、若いとき民話をやっております。宮城県に一つしかない村、そこに八年いました。それで、広報をやった教え子の親がしましてね、「先生、昔話やっていたんなら、村の人たちから話を聞いて、一か月に一回、広報にのせてくれ」と頼まれたんです。それで三年間やりました。はじめはね、なんか聞いたことあるのしたけど、だんだんとなんか話がなくなりまして、子どもを通じてね、「なんか、おばあちゃんが知ってたら、教えてくれ」って子どもに言いました。で家庭訪問に行きましたらですね、「先生、昔話知りたいから、おばあちゃん、教えてや

って」って言うわけですよ。それで出てきた話が、この「一粒の豆っこ」を、おばあちゃんが、わたしが家庭訪問した時ね、子どもが、「あの豆っこの話、してくれるでしょ」って、おばあちゃんに言って、それでわたしが話を聞きました。すごく色っぽい話なんですよ。でも、「ああ、これは、きっと、すごく大切な話であって、おばあちゃんがそのようにして伝えてきてる話だから、こんな形でも、話してくれただろうな」と。いまの話を聞いておましてね。ああ、これ大事な話だったんで、「艶話」っていうことで、切ってしまう話ではないと、思いました。きょうはたいへんありがとうございました。(拍手)

参加者 T—二十年ほど前でしょうか、日本民話の会の勉強会のときに、小野先生からうかがったかなと思うんですが、ほんとにきびしい暮らしの中で生きてこられた方には、話っていう、語るっていうことはもうできない、ということをおうかがったことがあります、それがドーンと、こうずうっと、自分も語らせてもらうときに、つねにこう、感じてるものがあります。今日のお話うかがいまして、ほんとうにやっぱり、生きていくということ、民話をとおして、いろんな角度から、伝えていければいいのかなあと、しみじみとまた、再確認させていただきました。ほんとにありがとうございました。(拍手)

小野—二十年前に言ったことを覚えてくださって、ありがとうございました。やっぱり民話を語ってくださる方々、それから、民話など語りも語られもしなかった、そんなもの話してるひまもない、きらいだあって、こういう方もあります。ですから、民話を語るからいい、語らないからいけないってことは、言えないと思うし、それぞれの事情の中で、語る人もいれば、語れない人もおられたってことを、やっぱり採訪していますと、つくづく身に染みるんですね。豊かな話を飽きずに語ってくださる、さっきお見せしたような、永浦さんや伊藤正子さんもおられますけれども、そんな話は聞いたこともないし、そんな暇もなかったって、非常にある意味ではにべもなく、しかしつらそうに言われる方もあるんですね。物語の世界をもつことさえ、許されなかった方々もたくさんいらっしゃる、そういう方も含めながら、今日まで、先祖の生み出してくれた言葉がきているとしたら、気がついた私たちは、その一つ一つを大切に扱って、次の世代にいい形で、伝えていくことができれば、こんなうれしいことはないっていうふうに思っています。どうも。(拍手)

小田嶋—ありがとうございます。…はい。

参加者 U (清水チナツ) —きょうはありがとうございました。わたしもこの話を一番最初に聞いた時に、すごく心に残った宮城の方言で、「いだましいなあ」っていう言葉が出てくるんですよ。わたしは出身が東北ではないので、最初「いだましい」って表現の指してるものがわからなくて、教えてもらうと「もったいない」っていうような意味があるんだっていうのを聞いたんですけど、やっぱり民話を音でというか、声で聞いているときに、「いだましいなあ」っていう言葉の響きが、とても心に残るものがありました。で、「もったいない」って意味もありながら、「いだましい」の中には、「いたい」っていうような響きもあるので、そのものを「もったいない」と思いながら、こちら側で胸を痛めている雰囲気もありますし、あとは「たましい」っていう言葉も見えてくるんですよ、その言葉の中に。だから一粒の豆を、肌身離さず、握って、大事に大事に、この後生き抜こうとした人たちが、一番最初それが、「いだましい」「いだましい」っていった響きの中に、「もったいない」と合わせて、なんか「たましい」を一生懸命とうとびながら、握っているかのような雰囲気もあるなあと思って。宮城で覚えた方言の中で、好きな一言でもあります。ありがとうございます。

小田嶋—ありがとうございます。ほんとに、「いたましい」の言葉には、たしかに「いたみ」というのが、「もったいない」という意味なんですけれども、あるとわたしも感じます。ありがとうございます。どなたか、言い忘れたことあれば…

参加者 F—むかしといまのちょうど中間ぐらいになるかもしれませんが、みなさんご存知ですかねえ。「ジャックと豆のつる」というお話。これ、イギリスの民話に入っているみたいですね。これは、さっき「むかしといまのちょうど中間」で言ったのは、どうしてかという、後家さんが出てくるんですよ。「むかしむかし、後家さんと息子がいました」と。後家さんは息子と二人で暮らしてる。つまり旦那いないんですよ、もう。どうしてかなあと、ぼく思うんだけど、こうゆうのはこれから起こってくるんじゃないかと。じっちゃんばっちゃんじゃなくなっちゃう。なんか先取りしているような感じのお話なんです。で、じつはその後家さんはですね、牛を飼って、一頭、それを元手に暮らしを立てていたんですけど、ある日牛がお乳を出さなくなっちゃったんですね。それで、どうしようかと思案した時に、息子が「それならぼくが市場に行って牛を売ってくる」と。で、出かけた途中でおじさんに会っちゃうのね。そして豆を五つくれるんですよ。その豆を勘定してみると、そのおじさんに言われちゃうのね。そうすると子どもは、片方の手に二つ、もう一方の手に二つ、あと口に一つくわえるんですね。これで五つだろうって言うんですね。で、それはできたんだけど、べつに褒美ももらえないのね。結局はその豆を三個だけおじさんからもらって、牛が売れない代わりに家に持って帰る。そしたらお母さんがものすごく怒って、「金にならんじゃないか」「売ると言ったじゃないか」と責める。それでその豆の、三つの豆を、深い穴だったと思うけど、そこに三つの豆を投げるのね。そしたらその一本から芽が出んですね。それがですね、天に届くんですね。そしたらそこには、いろいろ違った があるんだけど、わたしが読んだのは、エンドウの木がですね、芽を出して天まで届くんですよ。そうすると天に、大男の悪いおじさんとおくさんが住んでんですね。でそこには、たくさんエンドウがあつて、満腹になるわけですよ。

小田嶋—すみません、もうそろそろ時間なので、結論の方を、すみませんが…

参加者 F—ああ、そうですか。結論、えーと、そうですね。外国にもこういう豆の話があるということ。それがどういう意味か、わたしもよくわからないけど、前のときにぼくが話をしたときに、江戸時代にすでにイソップ物語の交流があったという話を、小野さんがおっしゃった気がするんですけど、これもあてはまるのかどうか、よくわからないんですが、やっぱり民間伝承でかなりね…

小野—ジャックと豆の木によく似た話は、日本にもあります。そしてやっぱり蔓が天まで伸びて行って、天まで行った人もたくさんいて。不思議なんですけどもね、世界中にとってもよく似た話もあるんですね。ただ今日のテーマは、そのことではなかったの、触れないでおきましたけれども、諸外国にも似たような話が、いろんな形で語られているっていうようなことを、また次の機会に考えてみたいと思いますので、そのときに、また今のお考えを聞かせていただきたいと思います。

参加者 F—それはぼくが最初に発言したときに、アメリカで森の生活をやった人が、大豆を撒いたっていうのと通じると思うんですよ、はい。

小野—そうですね、通じると思います。とても大切なことを言ってくださってると思います。ありがとうございます。

参加者F—はい、どうも失礼しました。(拍手)

小田嶋—はい、ぜひ言っておきたい方がいなければ、そろそろ終わりにしてもいいでしょうか。(拍手) きょうはほんとうに、民話の語る楽しさ聞く楽しさから、人間の歴史のいろんな流れから、人の生死にかかわるもっと深いところまで、民話がさまざまな何重にもなった深い層をなすことを、いろいろなところで見聞きしたような気がいたします。みなさんもいろいろ、どの面でもいいですので、持ち帰って、その場その場で、みなさん考えていただければなと思います。

では最後にですね、じつは恒例になっています、佐々木健さん、伝承の語り手の佐々木健さんが今日もいらっしゃってますので、「とんびとんび」の歌で最後をしめていただきたいなと思いますが、よろしいでしょうか。

小野—みんなで歌いましょう。

小田嶋—知っている方は、みなさん唱和お願いします。

佐々木—ほんともうしわけありません。きょうまで、こんな深い話の中に、連れてこられたことを、非常におもしろいことだと思っております。ひとつは、「民話は面白いもんだよ、楽しいもんだよ」ということを、徹底的に子どもたちに教えてやるんだと。そして二番目は、覚えてる話は、かならず話して聞かせることだ。そして…

とおーんび とんびとびい 舞あれ舞れ舞れえー  
とおーんび とんびとびい 舞あれ舞れ舞れえー  
男だったら 刀っこけっから 舞あれ舞れ舞れえー

とおーんび とんびとびい 舞あれ舞れ舞れえー  
女(おなご) だったら 鏡っこけっから 舞あれ舞れ舞れえー

どんとはれ  
(拍手)

小田嶋—ありがとうございました。それではこれで、「民話ゆうわ座 第六回」を終わらせていただきます。みなさん、ありがとうございました。(拍手)

—以上—